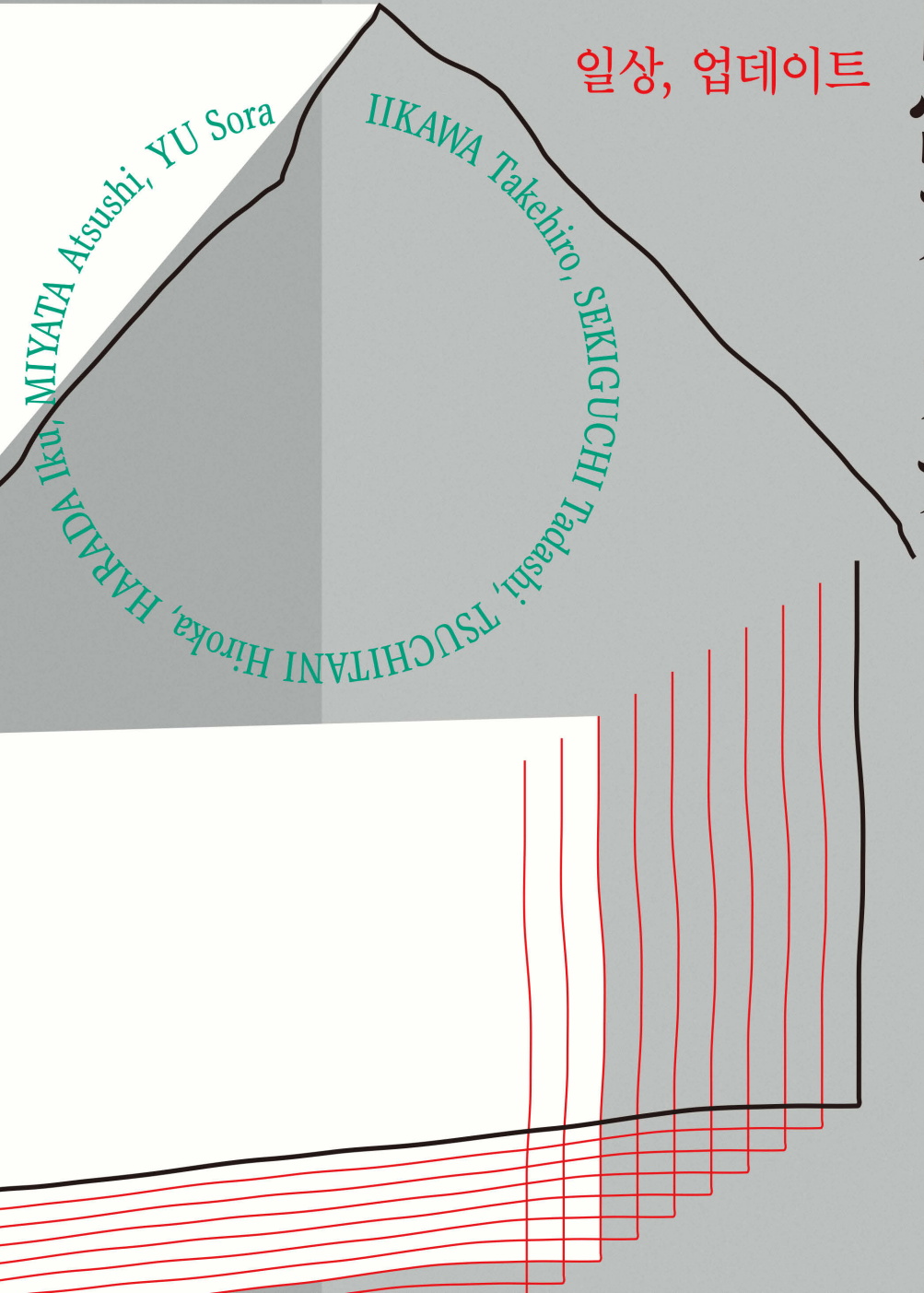


# Imagining the unseen everyday

일상, 업데이트

日常  
アッ  
プ  
デー  
ト





Imagining the unseen everyday

일상, 업데이트

# 日常アップデート

飯川雄大

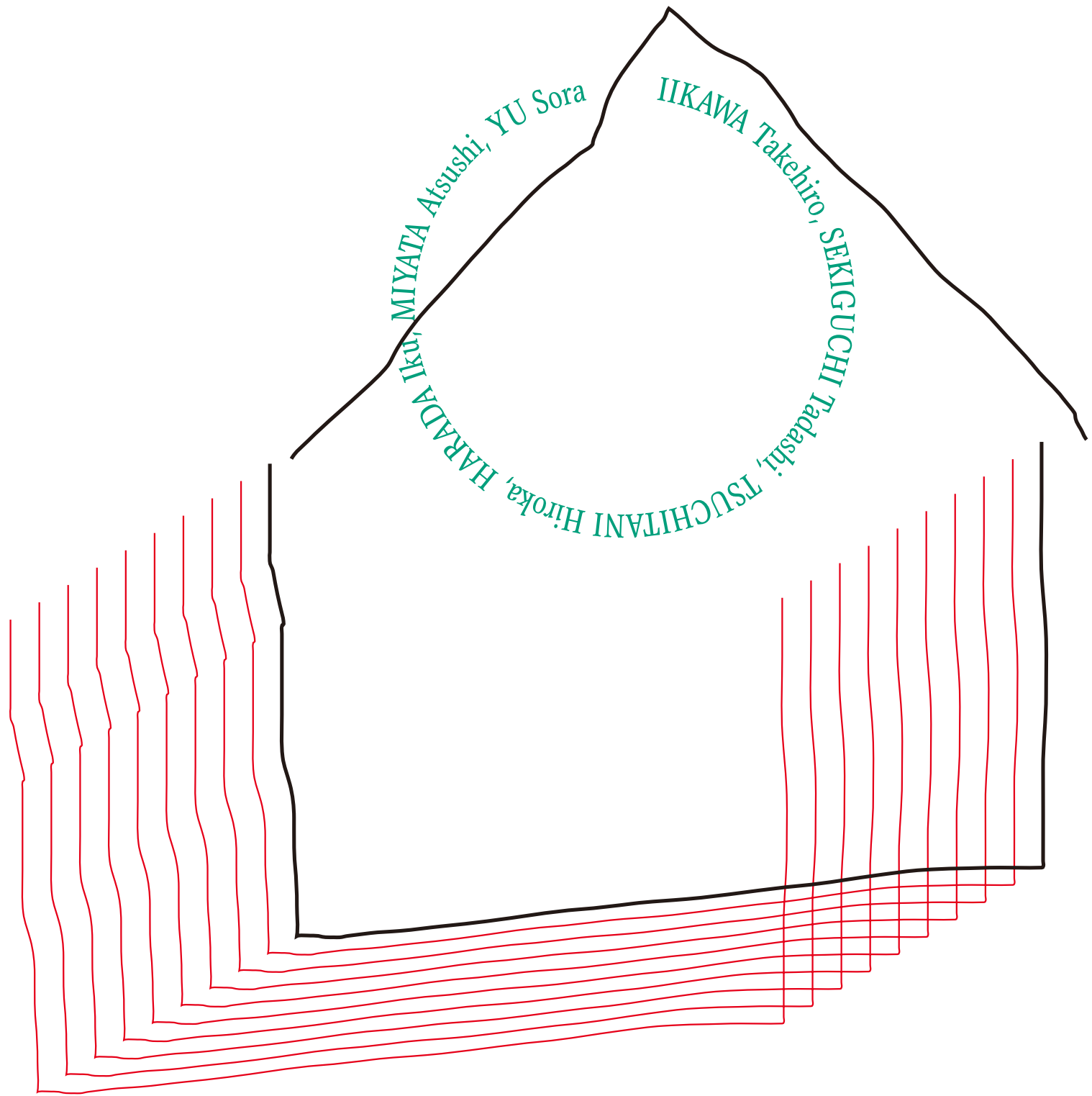
関口忠司

土谷紘加

原田郁

宮田篤

ユ・ソラ



## 日常アップデート

### 会期

2024年6月15日(土)–9月1日(日)

### 会場

東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1、2、交流スペース

### 主催

(公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

## Imagining the Unseen Everyday

### Exhibition Period

Saturday, 15 June – Sunday, 1st September 2024

### Venue

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery: Galleries 1, 2 and Interactive Space

### Organizer

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,  
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

## 일상, 업데이트

### 기간

2024년 6월 15일 (토)–9월 1일 (일)

### 장소

도쿄도 시부야 공원거리 갤러리 전시실 1, 2, 교류 스페이스

### 주최

(재) 도쿄도 역사문화재단 도쿄도 현대미술관 도쿄도 시부야 공원거리 갤러리

## ごあいさつ

東京都渋谷公園通りギャラリーは、このたび、展覧会「日常アップデート」を開催いたします。

社会はコロナ禍以前と同じ毎日を取り戻したかのように、人と関わり、集い、再び動くまでにあゆみを進め始めています。しかし一筋の光が見えてきた矢先に新たな災害が起き、私たちの記憶に大きな出来事として刻まれました。私たちは、このような事象に遭遇するたびに、日常の尊さや儚さを感じ、過去に積まれた記憶が奥深くへと押し込まれ、代わりに新たな体験の記憶がその上に重ねられることに気づかされます。大なり小なり、毎日とはその繰り返しなのかもしれません。

本展では、見過ごされるような光景や体験、聞き慣れたことば、どこかの誰かとの共同作業、その日の大切な記憶や事柄の記録、安心できるいつもの風景などさまざまな観点で日常を思わせる6名の作家の作品から繰り返される日々を考えます。

それぞれの作品から立ち上がる他者の日常に触れることで、さっきまで見えていたいつもの風景が新たな価値を帯び、私たちの日々を豊かにしてくれることを願っています。

最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた作家の皆様ならびにご協力いただいたすべての皆様に心から御礼申し上げます。

2024年6月

(公財) 東京都歴史文化財団 東京都現代美術館

東京都渋谷公園通りギャラリー

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery is pleased to present “Imagining the Unseen Everyday.”

Society has made strides towards recovering our pre-pandemic everyday routines, as we interact with others, gather, and move about again. Yet just as we were starting to see rays of light, new disasters have left imprints in our memories. Each time we are confronted by such events, we feel how precious and fragile everyday life is, and are reminded of how memories of new experiences bury past memories ever deeper. In ways large and small, perhaps our day-to-day is just this process over and over.

In this exhibition, six artists consider the repetition of daily life through works that compel us to think about the everyday from a range of perspectives: overlooked sights and experiences, or familiar words; collaboration with someone somewhere; recording the day’s important memories and happenings, or the reassurance of our daily surroundings.

We hope that encountering the everyday experience of others through these artists’ work can instill our familiar scenery with new value and enrich the everyday.

Finally, we would like to express our sincere appreciation to all the artists and everyone who made this exhibition possible.

June 2024

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,  
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

이번에 저희 도쿄도 시부야 공원거리 갤러리에서는 전시회 ‘일상, 업데이트’를 개최합니다.

사회는 코로나 사태 이전과 같은 일상을 되찾은 듯이 사람들이 서로 관계 맺고, 모이고, 다시 움직이기 위한 발걸음을 내딛기 시작했습니다. 그러나 한 줄기 빛이 보이기 시작할 때쯤 또 다른 재해가 발생하여 우리의 기억에 큰 사건으로 새겨졌습니다. 우리는 이런 사건을 겪을 때마다 일상의 소중함과 덧없음을 느끼며, 과거에 쌓아 올린 기억이 저 멀리 밀려나고 대신 새로운 체험의 기억이 그 위에 겹쳐지는 것을 깨닫게 됩니다. 크든 작든, 매일이란 그 반복일지도 모릅니다.

이번 전시에서는 무심코 지나쳤던 풍경과 체험, 익숙한 말, 어딘가의 누군가와 함께한 작업, 그날의 소중한 기억과 일어났던 일의 기록, 안심하게 만드는 매일의 풍경 등, 다양한 관점으로 일상을 떠올리게 하는 여섯 명의 작가들의 작품을 통해, 반복되는 나날들에 대해 생각해봅니다.

각각의 작품에서 드러나는 타인의 일상을 접함으로써, 방금 전까지 보였던 매일 되풀이되어 온 풍경이 새로운 가치를 가지고 우리의 일상을 풍요롭게 만들어 주기를 바랍니다.

마지막으로 이번 전시를 위해 애써주신 작가 여러분들, 협조해주신 모든 분들께 진심으로 감사의 말씀을 드립니다.

2024년 6월  
(재) 도쿄도 역사문화재단 도쿄도현대미술관  
도쿄도 시부야 공원거리 갤러리

展示 Exhibition

- 10 宮田 篤 MIYATA Atsushi
- 22 関口忠司 SEKIGUCHI Tadashi
- 30 土谷絢加 TSUCHITANI Hiroka
- 38 ユ・ソラ YU Sora
- 46 原田 郁 HARADA Iku
- 56 飯川雄大 IIKAWA Takehiro
  
- 66 関連イベント
- 68 あなたにとって「日常」とはなんですか? —— 来場者アンケートより

エッセイ・トーク Essay and Talk

- 74 日常アップデート 竹野如花
- 79 Imagining the unseen everyday TAKENO Yukika

日常ラジオ (アーティスト・トーク)

- 84 宮田 篤 「出会い」と「ずれ」から広がる世界
- 88 関口忠司と宮田 篤+笹 萌恵 共感と驚き——それぞれの日常から  
(ゲスト: 渡邊早葉・野村勇作 [社会福祉法人みぬま福祉会])
- 92 土谷絢加+笠松彩葉 (アトリエコーナス) 「つくることの日常」にふれる
- 97 ユ・ソラ 意識されない「糸」の大切さ、もろさを見つめる
- 101 原田 郁 「わたしの空間」をひらく窓
- 105 飯川雄大 「ふつう」の感覚を想像力で拡張する  
(ゲスト: 成田 久 [資生堂アートディレクター、アーティスト])

資料 Appendix

- 110 作家プロフィール Artists’ Profile 작가 소개
- 112 会場図 Venue Map
- 114 作品リスト List of Works

Exhibition

展  
示

凡例

- 各図版キャプションは、作品名、制作年を和英で記載した。
- その他、各作品の素材・技法・仕様、サイズなどは巻末の作品リストに記載した。
- 写真クレジットは巻末に記載した。

Notes

- The captions for the artwork images include the title and year of production in both Japanese and English.
- Other details such as materials, techniques, specifications, and dimensions of each artwork are provided in the list of works at the end of the catalogue.
- Photo credits are provided at the end of the catalogue.









2024年8月29日

今日もびぶんブックセンターで店番をしています。これもすっかり日常になりました。

びぶんブックセンターは、みんなでつくるおはなしの小さな本「微分帖」の文化センターとして、微分帖の普及と発展のための活動を行いました。かつて渋谷にあったバルコブックセンターを先達として、文化センターのようなものへ擬態し、まことしやかにおはなしづくりのあそびを紹介しました。企画は宮田篤が行い、運営に笹萌恵を加えて、ぶんスタさん(びぶんブックセンタースタッフさん)やギャラリーの看視スタッフさんに協力をいただきました。

会期前の1月ごろから交流研究事業として漫画家のひうち棚さんと「びぶんまんが」の文通を行い、《画家》ほか5編を制作しました。詩人の向坂くじらさんも、会期前に「微分詩」の実践をレポートにまとめてくださいました。このおかげで、びぶんブックセンターの基調になるムードが生まれたように感じます。

6月に会期が始まると、たくさんの方がいらっやいました。海外からの方、見えない方やろうの方なども来てくださり、できるだけそれに応えられるように準備をしました。特に、ぶんスタさんはたいへん有能かつ有能(!)で、微分帖への理解度やセンスもすばらしく、鑑賞サポーターとして手話でのガイドも行うなど、作家目線では今回の目玉といっても過言ではない活躍ぶりでした。

さらに、漫画家のもぐこんさんには4ページ漫画を、こいけぐらんじさんには4コマ漫画の制作をそれぞれ依頼し、文通形式で参加者とびぶんまんがの往復をしてもらいました。挑戦しがいのある漫画に、来場されるみなさんもこちらの予想以上に力をいれて続きを描いてくださいました。加えて会期中に生まれたご縁から、対話の場Wavesさんと会期の終盤に緊急企画「哲学対話と微分帖」を行えたことも、特筆すべきことです。

いつものように店番をしながら会場を見ると、たくさんの微分帖たちの奥に関口忠司さんの書がみえています。公園通り側の席では女の子がびぶん4コマ漫画に挑戦しています。入り口の近くで微分帖を熱心に読んでくださるおふたりがいるので、いっしょにおはなしを作ってみないか、これから話しかけてみようと思います。

宮田 篤



## 宮田 篤 「びぶんブックセンター」

6月15日(土)～9月1日(日)

東京都渋谷公園通りギャラリー 交流スペース



びぶんブックセンターは、おとなも子どももあそべるぶんがく《微分帖》の、ポップアップ文化センターです。微分帖の普及と発展のための研究活動、普及活動や交流事業などを行います。本展では、微分帖ワークショップ、一人でもできる微分帖、微分詩やびぶんまんがの研究発表、関口忠司 (p.22) とのコラボレーションである「びぶん書」などを実施し、渋谷で約1100点以上の作品ができあがりました。

びぶんブックセンター  
BIBUN BOOK CENTER



### びぶんブックセンターの運営

宮田 篤 + 笹 萌恵

ぶんスタさん (びぶんブックセンタースタッフ) :

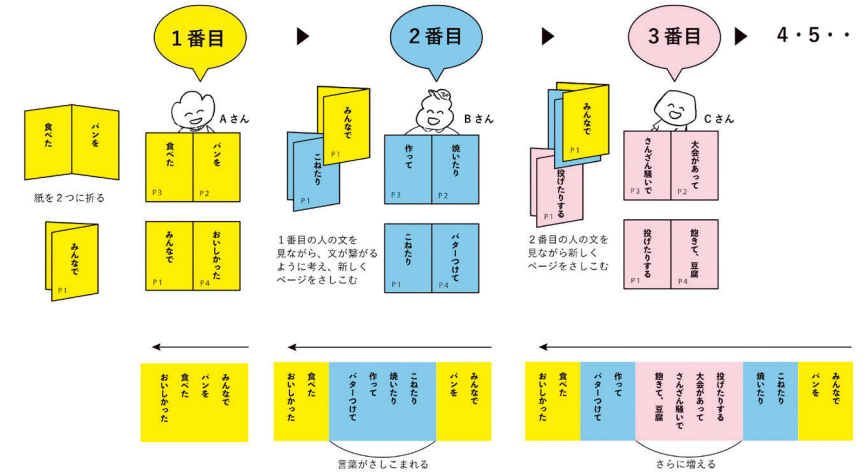
岡島珠実、村上 諒、茂木伶奈、  
四居恵以子、中塩眞理

### 宮田 篤 + 笹 萌恵

2010年より取手アートプロジェクト《アートのある団地》パートナーアーティストとして活動始める。その他の主な活動に「セカンド・フラッシュ」(岐阜県美術館、2019年)、「アーティスト・イン・ミュージアム宮田篤+笹萌恵meets岐阜県図書館」(2019年)、「音をかたち、かたちを音に」(安曇野市穂高交流学習センター「みらい」[長野]2016年)、「あざみ野子どもぎやらい」(横浜市民ギャラリーあざみ野、2015年)など。

### 微分帖とは

微分帖はみんなでつくるおはなしの小さな本の名前で、そのおはなしができるちょっとかわった作文の仕方の中で、それが行われる場所の呼び方でもあります。2008年に最初の微分帖ができてから今年で16年になります。



### 微分帖のしくみ

- 1 1番目の人が、2つ折りにした紙の4ページを使って物語をかきます。
- 2 2番目以降の人は前の人がかいた物語に沿って、別の2つ折りにした紙を使い、新たに言葉を差し込んで物語をつなげていきます。
- 3 これをリレー形式で行い、ページが増えていくと予想外の展開のお話が発生します。

### 微分帖ワークショップ

日時 | 会期中随時実施

会期中、宮田篤、笹萌恵、ぶんスタさん (びぶんブックセンタースタッフさん) によって、微分帖ワークショップを実施しました。



## はさもう！びふんまんが

日時 | 会期中随時実施

4コマまんがのお題に合わせて、微分帖のようにまんがをはさんでもらいました。また、来場が難しい方も、ワークシートをダウンロードして描き、メールすることで参加できるしくみを用意しました。

その1 | こいけぐらんじさん  
(シラオカVo./Gt・漫画家・イラストレーター)とまんがで文通

その2 | もぐこんさん(漫画家)とまんがで文通

その3 | ひうち棚さん(漫画家・会社員)とまんがで文通



びふんまんが(こいけぐらんじ版ワークシートによる)



## びふん書

日時 | 9月1日(日)

展示会最終日に、同じ展示室で書の作品を展示した関口忠司とのコラボレーションとして「びふん書」づくりを行いました。関口の作品から《ときはすぎゆくまに》を取り上げ、参加者には「ときはすぎ」と「ゆくまに」の間に思いの思いことばをはさんでもらいました。



## 向坂くじら(詩人)1日研究員

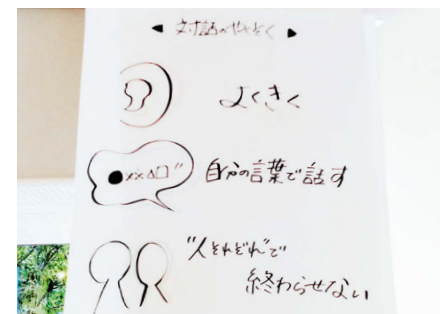
日時 | 6月22日(土)  
14:00-18:00 1回15-30分程度

1日研究員の向坂くじらさんがびぶんブックセンターに滞在し、過去の微分帖を読み解いたり、来場者と微分帖をつったりする研究活動を行いました。

## ペンびぶんフレンドクラブ「ことば舎」

日時 | 会期中随時実施

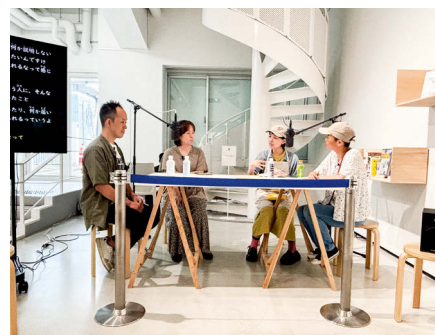
びぶんブックセンターの1日研究員・向坂くじらさんや、くじらさんが代表を務める国語教室「ことば舎」の受講生さんたちと、参加者が微分帖で文通できるしくみを用意しました。



## 哲学対話と微分帖

日時 | 8月17日(土) 14:00-16:00  
企画 | びぶんブックセンター  
協力 | 対話の場 Waves

「対話の場 Waves」の運営者・いだはづきさんが微分帖に興味を持ってくださったご縁から、同氏をお招きして哲学対話の場を開催。宮田篤+笹萌恵や参加者と「日常アップデート」をテーマに哲学対話と微分帖づくりを行いました。



左から：野村勇作、渡邊早葉、笹萌恵、竹野如花

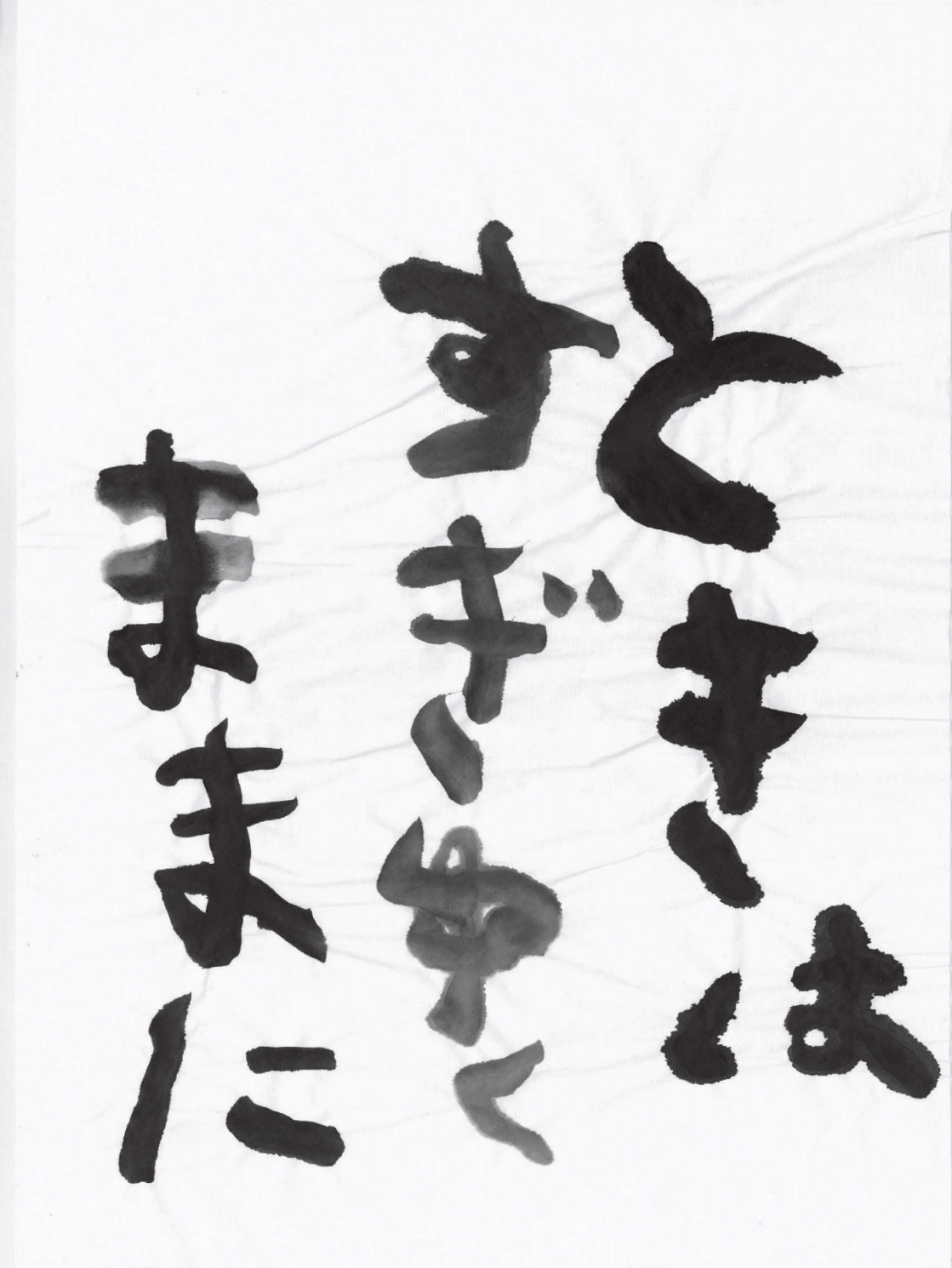
P.88参照

## 日常ラジオ #5 公開収録：宮田 篤+笹萌 恵

日時 | 7月6日(土) 14:00-15:30  
ゲスト | 渡邊早葉・野村勇作(社会福祉法人みぬま福祉会) 司会 | 竹野如花(東京都渋谷公園通りギャラリー)

出展作家と担当学芸員が、作家の日常や出展作品についておしゃべりする連続トーク。この回は公開収録とし、びぶんブックセンターの笹萌恵に加え、ゲストに同じ展示室で発表した故・関口忠司が所属していた「みぬま福祉会」の職員をお迎えしました。





ときはすぎゆくまに  
 As time goes by  
 2018

エレベーター

かしこ



## 関口忠司の展覧会を終えて

関口さんの作品はこれまでも何度か注目されて個展などをする機会があったのですが、関口さんの人となりや作品の制作過程などを深掘りしてお伝えする機会はありませんでした。完成した作品単体でも人を惹きつける魅力はあると思うのですが、どのような人がどんな環境でどんな人に支えられて作られたのか……そんなことを知っている人から聞いたり想像したりしながら作品を見ると、またさらに作品の魅力が引き出されるのではないかと思います。残念なことに関口さんは亡くなってしまい新たな作品が生まれてくることはありませんが、今でもたくさんの方に注目されていることを嬉しく思いました。

これから先も仲間たちのアートが注目され、たくさんの人の目に触れ、作者の人となりや背景に思いを馳せる機会があることを願いたいと思います。

社会福祉法人みぬま福祉会  
大地（入所施設）スタッフ 野村勇作

このたびは関口忠司さんの作品を展示していただき、心より感謝申し上げます。

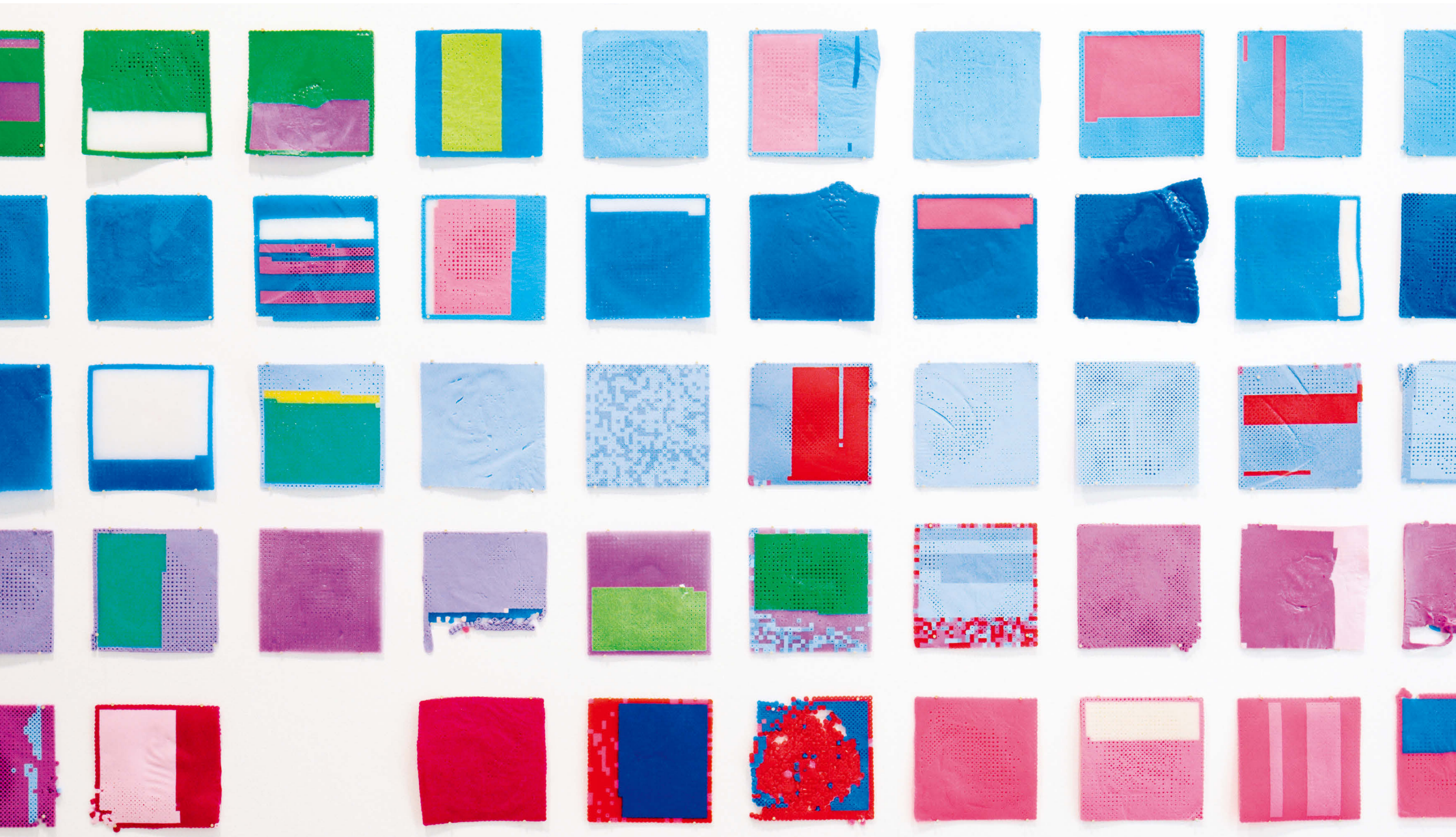
関口さんは残念ながら亡くなられていますが、亡くなられてもなお、作品が生き続けることの尊さを感じています。関口さんのユニークさ、かっこよさが詰まった今回の展覧会は、わたしたちスタッフも改めて作品を振り返る機会になりました。関口さんの書を伝えつないでいくことの使命と責任を感じています。

なんだかほっこりする言葉や、体験から生み出される作品は、思わず笑いがこぼれるものから、書き損じから生まれる奇跡の1枚まで、すべては関口さんの人となりが表れていますし、関口さんにしか表現できないものだと思います。今回、宮田さん+笹さん（宮田篤+笹萌恵）とのコラボレーションで新たな広がりや、いろいろな方が言葉をつないでいくことの意味を感じ、とても感慨深いです。わたしたちは、これからも関口さんの書を伝え続けていきたいです。

社会福祉法人みぬま福祉会  
川口太陽の家・工房集スタッフ 渡邊早葉





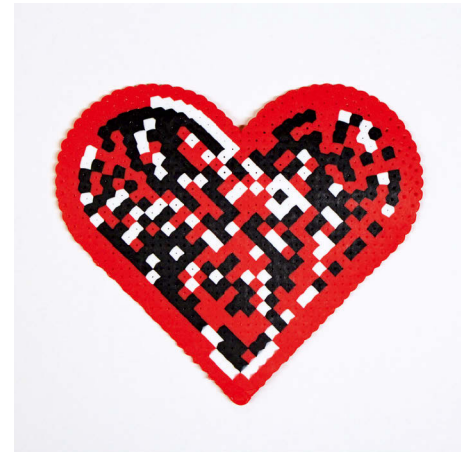
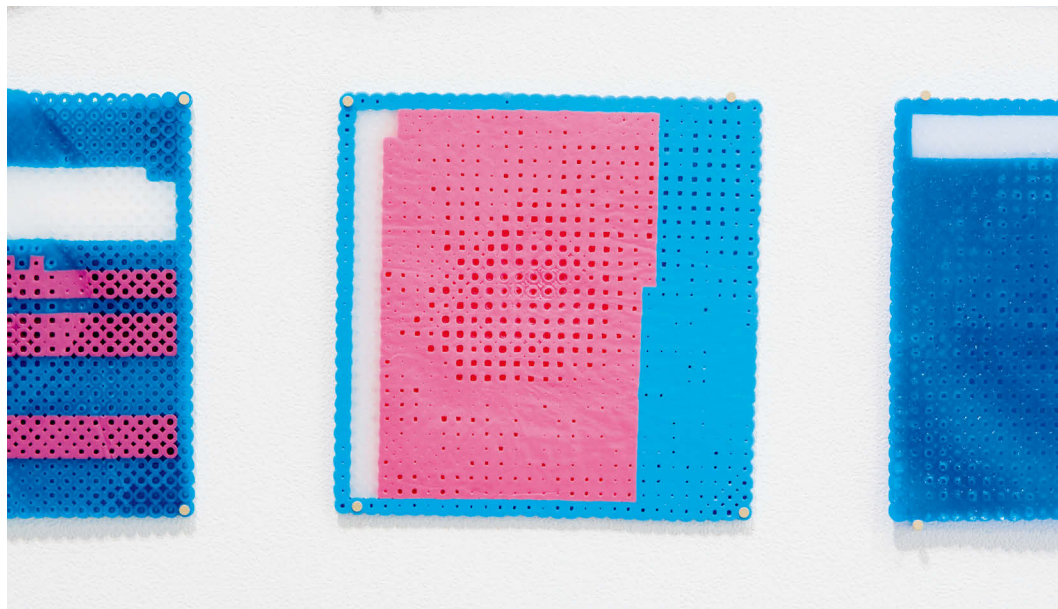




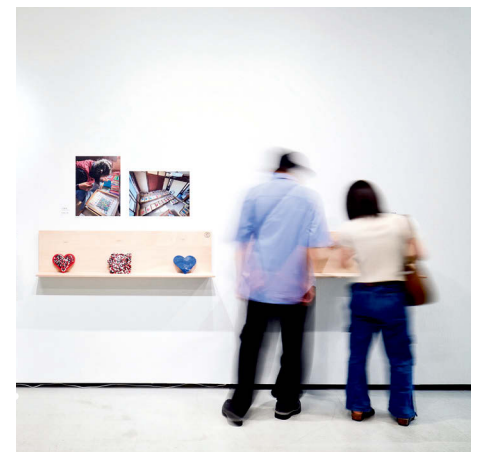
上写真左 | Top left  
micro colomy (No. 22)  
2021

上写真右 | Top right  
COLORNY (No. 2021.1\_001)  
2021

下写真中央 | Bottom center  
COLORNY (No. 2017\_163)  
2017



本ページに掲載した作品群は、  
作家が本展のために制作した「さわれる作品」です。  
The works presented on this page are "touchable artworks"  
created by the artist specifically for this exhibition.





## 土谷さんの日常と展覧会を振り返って

土谷さんにとって制作は日常そのものだと思う。2015年にアトリエコーナスに来て以来、月曜から金曜までほぼ毎日、3枚ほどの作品を完成させ、総数は2500枚を超えている。ビーズを並べ、圧着させる手つきに迷いはなく、利き手と反対の左手でビーズを並べる様は職人のよう。一見ランダムにみえる模様も意図的に作られていると知ることができる。色彩が溢れかえるような作品は、英語のcolor(色彩)とcolony(群体)を合わせCOLORNY(カラニー)と名付けられた。

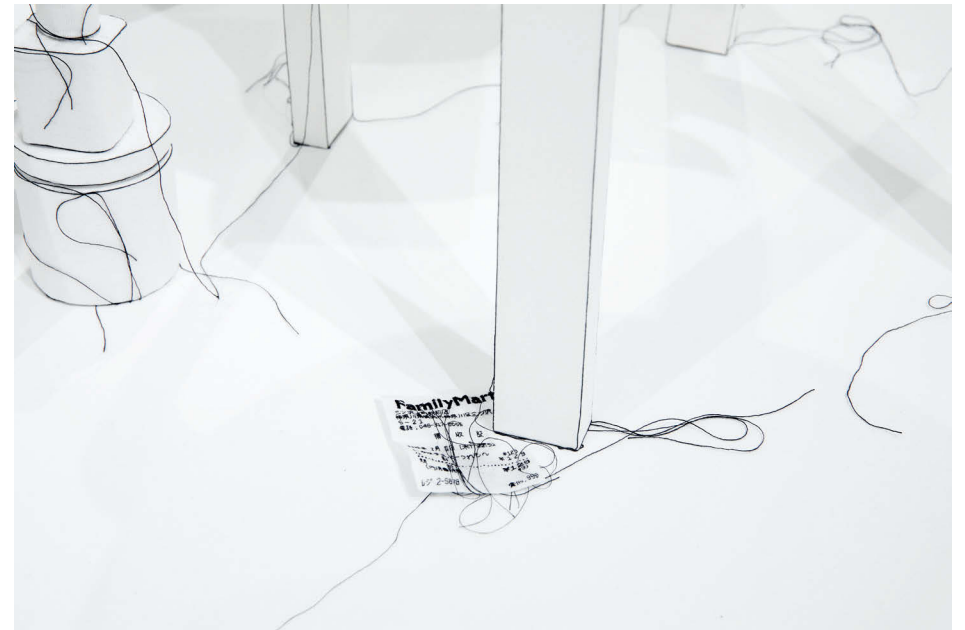
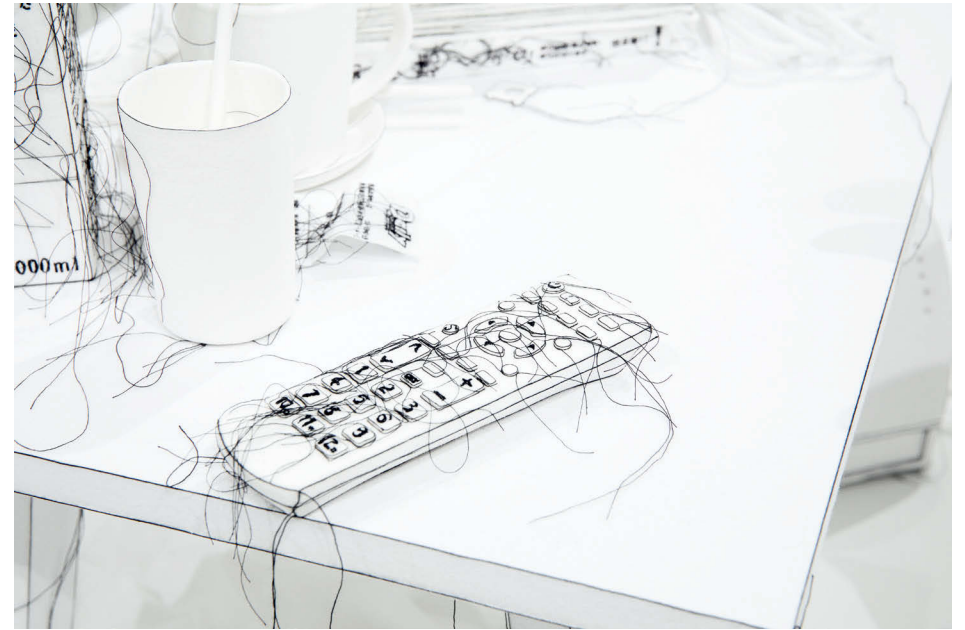
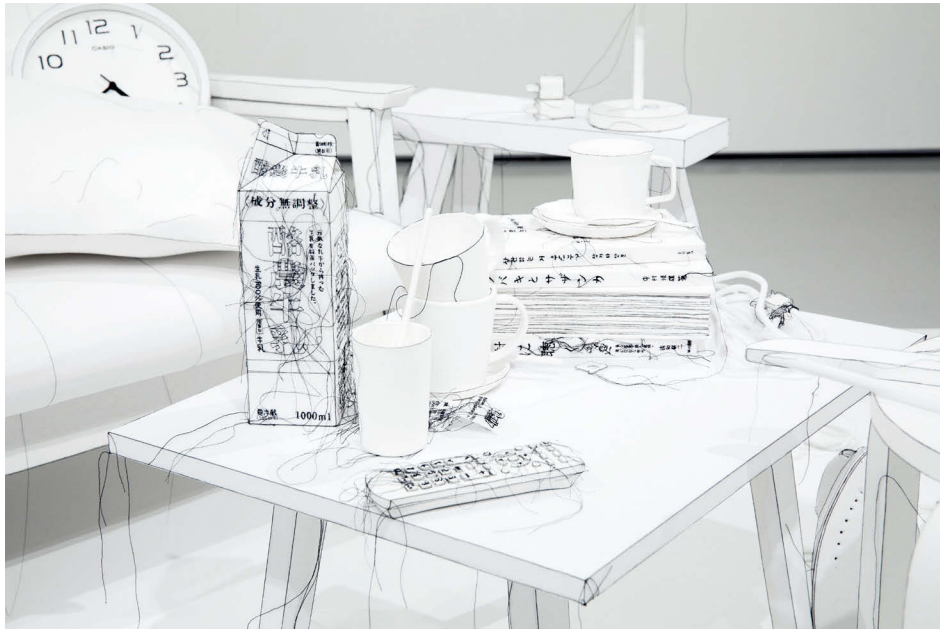
楽しいことがあった日は鼻歌を歌い、悲しいことがあった日は心を落ち着けるように黙々とビーズを並べ、お気に入りの服と同じ色の作品は服に重ねて眺め、ビーズを袋越しに揉んで癒されている。季節やその時の好みにより色味は変化し、完成した作品はバニラ・ストロベリー・胡麻プリン・抹茶……とフレーバーにたとえ、色々な人に見せてコミュニケーションが生まれる。似た作品はあっても同じものはない。常に彼女の隣にある作品は日記のようで、土谷紘加の日常がぎゅっと詰まっている。

本展では土谷さんと共に作品選考を行った。初期から現在までの作品を収納した箱から、年代ごとに選んでいく。「この時期は白が多いね」「これ展覧会に出したね」と作品を選びながら、思い出も振り返ることができた。

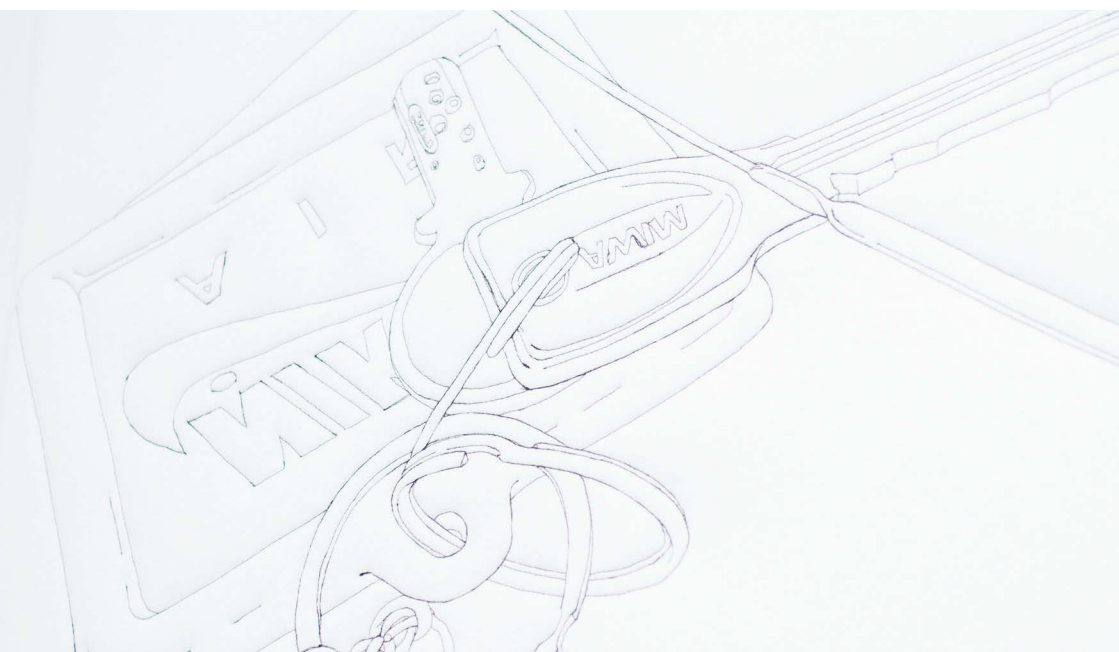
また展覧会に合わせて新作と、さわれる作品の制作を頼んだ。来場者がさわれる作品を展示する案は企画者の竹野さんから頂いたものだが、思い返すと、土谷さんは完成作品を1日持ち歩いている。彼女の「作品にふれる」という日常の行為ごと、来場者の方に体験していただくという予想外のリンクになった。予想外というと渋谷という土地柄か、来場者の感想や展示の様子をSNSで拝見する機会が多かった。SNSという不特定多数の人との交流の場でありながら、個々の日常を投稿するツール。そして投稿者は日記のようにそれを振り返ることができる。そんな中にパッと土谷さんの作品が映り込む。知らない誰かの日常を彩り、溶け込んでいると思うと少し面白い。

特定非営利活動法人コーナス  
アトリエコーナス 笠松彩葉





普通の日(部分)  
Ordinary day (details)  
2020-2024

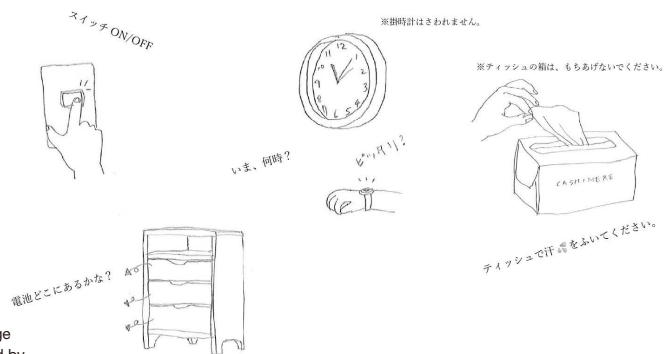


上 | Top 机の上(部分)  
On the desk (detail)  
2023

下 | Bottom 玄関の棚の上(部分)  
On the shelf at the entrance (detail)  
2023



ユ・ソラ「さわれる作品」の楽しみ方



本ページに掲載した作品群は、作家が本展のために制作した「さわれる作品」です。

The works presented on this page are "touchable artworks" created by the artist specifically for this exhibition.

絵:ユ・ソラ



## 日常アップデート

自分のことが好きで、自分の部屋を描き始めた。床にはいろいろとものが落ちていて、椅子やソファには洋服の山ができています。ごちゃごちゃしている机の上、棚の上、引き出しの中。描いていけば、ものの中に眠っていた記憶が蘇り、作品が完成される頃にはとても特別な記憶になっていた。日常の姿を描くことは、最初は自分だけのためであった。

3.11の揺れた日に、私は東京にいた。数日後、帰りの飛行機は問題なく動いてくれて、無事帰れて良かったねって、日常に戻った。3年後、韓国で旅客船が沈没する事故があった。船が沈んで行く姿、大勢の人が悲しむ姿が生中継されていた。考えてみれば、自分の身近なところで、知らないところで、悲しいことは何度もあった。

災害や事故、感染症や戦争、時にはほんの小さなことで、多くの人が日常を失ってしまう姿をテレビやインターネットで見ている。自分にもそんな日が来るかもしれないという不安と恐怖が常に心の奥にある。当たり前になっていた日常。その脆さに気づいてから、作品を作ることは自分だけのためじゃなくなった。何気なく生きている「今」の大切さをみんなに気づかせたい。人々の心の奥に潜んでいる不安を少しでも和らげたい。

街を歩くと知らない人々の日常が見えてくる。干されている洗濯物、閉まっているカーテン、植木鉢、落ちているゴミ。誰もが似たような日々を過ごしていると思うと安堵する。平凡と平和はきっと同じ顔をしているだろう。

そんな日々の中、子が生まれ、歩けるようになり、言葉を喋りはじめた。たくさんの新しい幸せが生まれ、その裏には新しい不安も芽生えた。守りたいものが増えると恐れるものも増えていく。些細なことで大きく揺れて、少し変わって、新しい日常になり、また時間が経つとただの日常になる。

知らない人と些細な日常のことを語り合いたい。誰かの日常が揺れるとき、そこで転んでしまわないような小さな支えになれるように、日常の平凡な顔を描き続けたい。

ユ・ソラ



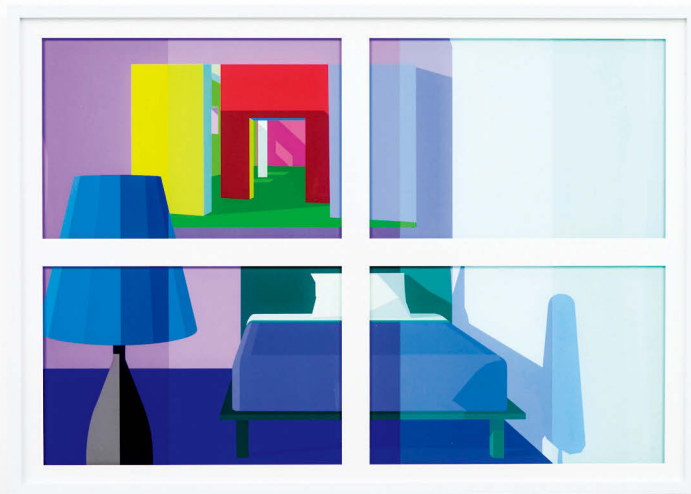
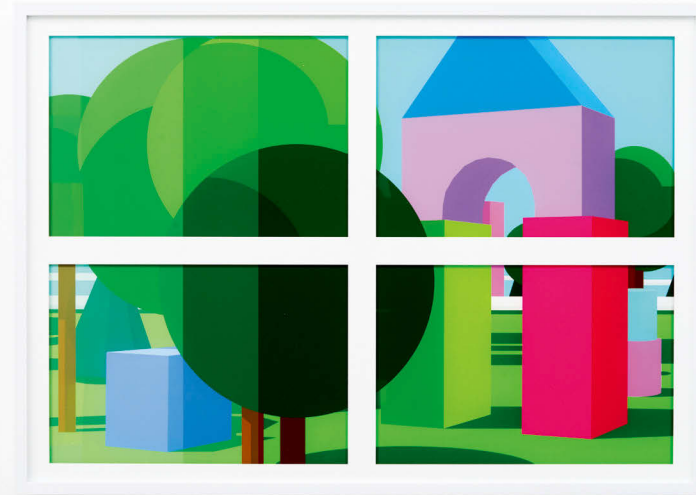




GARDEN 2024 #001  
2024



GARDEN 2024 #002  
2024



上 | Top  
WINDOW 2024 (flat) #001  
2024

下 | Bottom  
WINDOW 2024 (flat) #004  
2024

上 | Top  
WINDOW 2024 (flat) #002  
2024

下 | Bottom  
WINDOW 2024 (flat) #005  
2024

## 「窓」と出会う

絵を描き発表する行為は、自分の内側を窓として外界に開き、世界に新たな光を差し込む試みだ。古来より窓は内と外、現実と幻想の境界として語られ、絵画でも重要なモチーフとなってきた。今回、この「窓」を制作コンセプトに取り入れ、仮想世界と現実の狭間を探る作品を生み出そうとした。

日常という舞台で、私たちは無意識のうちにいくつもの見えない窓を通り抜けている。その窓の向こうには、他者の思いや、自分でも気づかぬ感情が潜んでいるのかもしれない——。そう強く実感したのが、展覧会の一環として開催されたワークショップ「共感の窓際」だった。参加者の手によるおおよそ200もの窓の場面を受け取り、私の仮想世界のなかには壮大なギャラリー空間が立ち上がった。気づけば、自分だけの理想郷だった世界が、いつの間にかその枠を超えていた。これは確かなアップデートである。

コロナ禍を経て、私たちのコミュニケーションの多くはネット上のSNSへと移り変わった。独り言の場であり、他者との繋がりを求める場でありながら、時に痛みやネガティブな感情が渦巻き、フェイクが濁流のように流れていく。その混沌の中で価値観を守ることは難しい。幼い頃から言葉で感情を表現することが苦手だった私は、絵を描くことを選んだわけだが、絵を描くことは言語を扱うことよりもっと原始的な行為であり、絵を通じて感情や価値観を優しく伝え合えると信じていた。だから「共感の窓際」は、かつての集いの場が持っていた温かな交流を再び呼び覚ましたのではないだろうか。

2024年春、実は何に対してもピントが合わない曇った心の状態にあった。しかし制作を始め、後に鑑賞者として展覧会に触れた時、笑みが溢れ、次第に晴れていくのを感じた。この「日常アップデート」展は、かつて子どもだったすべての大人たちへ、そして多様な視点を持つすべての人々へ、日常に突然新しい次元の「窓」が現れる——。そんな喜びの瞬間を味わってほしい、そう願った場であった。

原田 郁



## 原田 郁 ワークショップ「共感の窓際」

ワークショップ受付期間 | 6月15日(土)–7月28日(日)

展示期間 | 8月1日(木)–9月1日(日)

展示会場 | 東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室2、仮想世界内ギャラリー



《inner space》(details) update 2024.08 ©Iku Harada

《inner space》は、原田郁が2008年末にコンピューターの中に架空世界をつくり、アップデート(更新)とアーカイブ(記録保存)をし続けている日記のような作品です。その作品内のギャラリーに「共感の窓際」に参加してくれた約200名の窓の絵を展覧会会期中のみ展示・公開しました。

## ワークショップのテーマ「窓」

窓はしばしば文学や芸術作品の中で内部空間と外部景色との対比を象徴し、心の中の世界と外の現実との対話を表現しています。窓は物理的な境界を超え、精神的な次元との接点として描かれ、それによって作品に深い意味が与えられています。今回、参加者は部屋の中と外をつなぐこの「窓」をテーマに絵を描いていきました。普段日常でよく目にする部屋の窓から、オリジナル空想の窓まで、それぞれが自分なりの窓の絵を描きました。

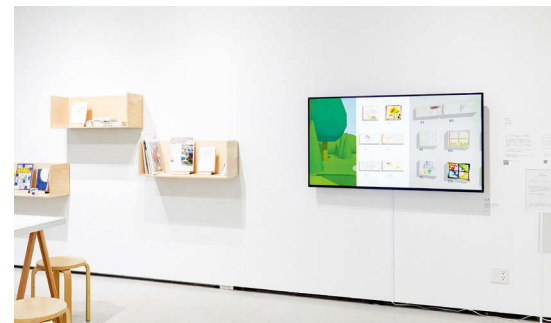
### ワークショップ概要



好きな窓フレームの用紙を選びます(用紙は会場の東京都渋谷公園通りギャラリーとオンラインで配布)。

窓フレームの中に絵を描きます。色は濃い目に、はっきりと描きましょう。作品タイトルもぜひ付けてみましょう。

映像作品《inner space》内のギャラリーに展示されます。8月1日(木)からギャラリーとオンラインで展示・公開します。



《inner space》(details) update 2024.08 ©Iku Harada (左はギャラリーでの展示風景)



デコレータークラブ  
— 0人もしくは1人以上の観客に向けて  
*Decorator Crab — Expecting Spectators*  
2024





*Decorator Crab — Pulling Time*  
2024





## それぞれの「考える時間」が動き出す

「ハンドル回してみてください!」「ロープ引っ張れます!」「その紐も大丈夫!」「バッグも転がせます……」と、僕が希望した作品案内を看視スタッフが丁寧にしてくれていた(ほんとは、何も言わず、来場者が自然に動かしてほしいけど、それはなかなか難しい)。壁のハンドルを回すと、カリカリと音はするけど何も起きない。ハンドルの側の壁にゴミみたいな細い紐が出ていて、それを引っ張っても、ユ・ソラさんの作品の右下あたりの壁から出てる太いロープをどれだけ引っ張っても何も起きない。鑑賞者は、何か変化がある? どこか動くんじゃない? と戸惑いつつ会場をキョロキョロしながら、ギャラリーの隅々を見回したり、そのまま帰ったり、何度も戻ってくる人もいた。

普通の展覧会では作品は触ってはいけないことが多い。「日常アップデート」展では、ユさんの紐を扱った作品に一部分は触ってもいい箇所があった。ひとつの展覧会の中に、強く引っ張ってもいい紐、触ってもいいけど引っ張ったらダメな紐、まったく触ったらダメな紐もあって、こんなややこしい展覧会はなかなかない。しかも、僕はどんな作品かについて、ほぼ内緒にしてほしいとお願いしたから、鑑賞者もスタッフの皆さんも大変だったと思う。

スタッフは「回してください」という割に、戸惑う鑑賞者にその後何にも言葉をかけないこともあるし、どんな作品か絶対知っているけど知らないふりをしてくれたり、一緒に考えてくれたりした。その様子はよくある展覧会のお客さんと看視スタッフの間合いとは違って会話が多い。

会期後半は展覧会が始まった頃と比べて、鑑賞者が何か探したり想像したり分からないことにイライラしたり、別の場所で起きているかもしれないことについて考える時間がたくさん生まれているみたいだった。

気がついたのは、作品はまったく変化してなくて、その周りが変わっていくというか、看視スタッフやギャラリーの竹野さんたちが、どう見てもらうのがいいかを作家の僕よりも考えてくれていたことで、それが嬉しかった。

東京都渋谷公園通りギャラリーの外に繋がって起きていたことを見た人は少なかったかもしれないけど、この記録集を見たり、あの道を通る時とかに、何であんなことしたんやろ? とか思い出してもらえたら幸いです。

飯川雄大



## 飯川雄大 「デコレータークラブ—新しい観客」

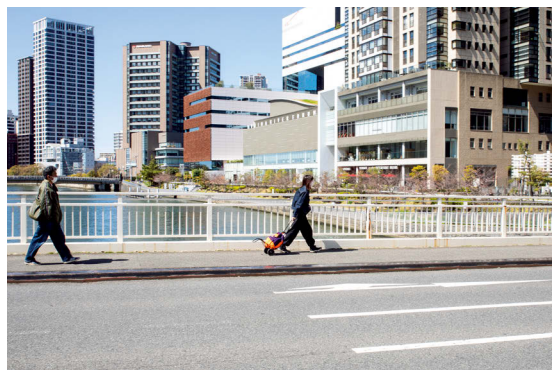
期間 | 6月15日(土)–9月1日(日)

会場 | 東京都渋谷公園通りギャラリーおよび右記各会場



《デコレータークラブ—新しい観客》2024年  
撮影：阪中隆文

飯川雄大の《デコレータークラブ—新しい観客》は、鑑賞者が展示室に置かれているキャリー付きの《ベリーヘビーバッグ》を、同時期に開催されている飯川の他の展覧会場まで運ぶという作品です。今回は東京都渋谷公園通りギャラリー、CAPSULE（東京）、高松市美術館、鳥取県立博物館、LAG (LIVE ART GALLERY) (東京)の間を約40名の鑑賞者たちが猛暑の中、作品を運搬してつなぎました。美術作品を運ぶ行為がアートとなり、自分が鑑賞の対象となる楽しさや不安、新たな観点を得られる期待感、道路のちょっとした段差や電車とホームの間などの公共のバリアフリーへの課題など、鑑賞者が作品とともに街に出ることによっていつもの日常とは違う視点をえられる機会になりました。



《デコレータークラブ—新しい観客》2022年  
「感覚の領域 今、『経験する』ということ」展  
国立国際美術館と個展「デコレータークラブ：メイクスペース、ユーズスペース」兵庫県立美術館での運搬実施の様子  
撮影：飯川雄大

### 《デコレータークラブ—新しい観客》

《デコレータークラブ—新しい観客》は、2022年、同時期に飯川雄大の作品展示がされた国立国際美術館（大阪）と兵庫県立美術館の2つの展覧会場において、キャリーにのせた《ベリーヘビーバッグ》を鑑賞者が運搬してつなぎ作品として制作されました。その後、同年に彫刻の森美術館（神奈川）とACAO SPA&RESORT（静岡）の間でも実施されました。本作は、参加した鑑賞者たちに作品を運び出すという非日常的な体験の機会をつくりだす一方で、その光景を目撃した人々は、図らずも作品の「鑑賞者」となる可能性をもつことにもなります。鑑賞者の行為が展示空間を拡張するとともに、「新しい観客」を生み出し続けるのです。

### 参加施設・展覧会

○CAPSULE（東京都世田谷区）

飯川雄大

「デコレータークラブ：ニューディスプレイ」

会期 | 6月1日(土)–7月7日(日)

休館日 | 月曜日から金曜日

貸出及び受入期間 | 上記会期に同じ

○鳥取県立博物館（鳥取県鳥取市）

アートって、なに？ ～ミュージアムで過ごす、みる・しる・あそぶの夏やすみ

会期 | 6月29日(土)–8月25日(日)

休館日 | 7月29日(月)

貸出及び受入期間 | 上記会期に同じ

○高松市美術館（香川県高松市）

常設展示

会期 | 6月18日(火)–8月31日(土)

休館日 | 月曜日（月曜日が祝休日の場合は翌火曜日）

貸出期間 | 6月18日(火)–8月31日(土)

受入期間 | 6月18日(火)–9月22日(日)

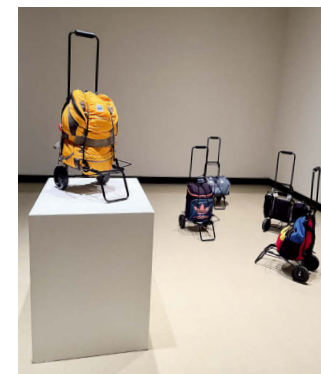
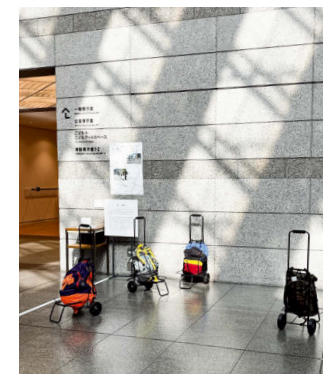
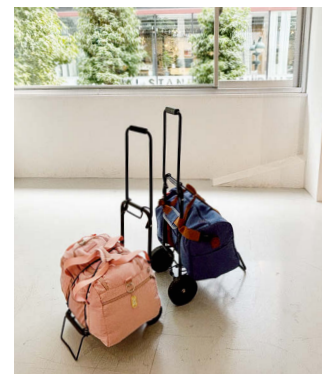
○LAG (LIVE ART GALLERY) (東京都渋谷区)

デコレータークラブ：長い仕事 飯川雄大

会期 | 8月9日(金)–8月31日(土)

定休日 | 日曜、月曜、祝日

貸出及び受入期間 | 上記会期に同じ



左から：東京都渋谷公園通りギャラリー、高松市美術館、鳥取県立博物館



P.105 参照

### 日常ラジオ #6 公開収録：飯川雄大

日時 | 7月13日(土) 17:30–18:30

ゲスト | 成田 久（資生堂アートディレクター、アーティスト）

司会 | 竹野如花（東京都渋谷公園通りギャラリー）

「日常アップデート」出展作家と担当学芸員が、作家の日常や出展作品についておしゃべりする連続トーク。この回は公開収録とし、アーティストの飯川雄大（写真左）に加え、ゲストとして資生堂アートディレクターで、アーティストでもある成田久氏をお迎えしました。

学芸員によるギャラリートーク  
(手話通訳付き)

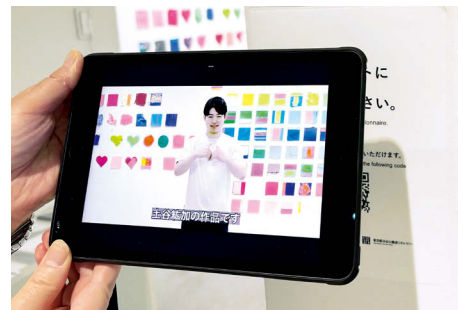
日時 | 8月9日(金) 19:00-19:30  
 解説 | 竹野如花 (東京都渋谷公園通りギャラリー)  
 手話通訳 | 瀬戸口裕子、伊藤妙子



展覧会担当学芸員による作品解説を、サマーナイト・ミュージアムの時間を活かして実施しました。また、手話通訳にも対応しました。

手話ガイド

日時 | 会期中公開  
 ナビゲーター | 西脇将伍  
 ナレーション・手話通訳 | 岡島珠実  
 手話監修 | 長井恵里  
 撮影・録音・整音 | 横溝倫暁  
 ディレクター | 二瓶 剛  
 制作 | ONDO Lab



各展示室の壁にあるコードを、スマホか、貸出用iPadで読み取ることで利用できる手話ガイド映像を提供。音声と字幕付きで、障害のあるなしに関わらずどなたでもご利用いただけるかたちとしました。

テキスト | 竹野如花  
 (東京都渋谷公園通りギャラリー)  
 企画 | 東京都渋谷公園通りギャラリー

鑑賞サポーターとおしゃべり  
鑑賞ツアー (手話通訳付き)

日時 | 8月18日(日) 14:00-15:00  
 鑑賞サポーター | 岡島珠実、村上 諒、茂木伶奈  
 手話通訳 | 橋本一郎



当ギャラリーで活動する鑑賞サポーターとともに、作品の好きなおとところや気になったところを気軽におしゃべりしながら、展示を見てまわり、作品の感想を共有しました。

日常ラジオ

日時 | 下記日程で収録。7月3日以降順次会期中配信  
 (YouTube ポッドキャスト)  
 司会 | 竹野如花 (東京都渋谷公園通りギャラリー)  
 収録・編集 | 小山友也  
 テキスト版編集 | 内田伸一

- 6月24日(月) #1 土谷紘加
- 6月28日(金) #2 ユ・ソラ
- 7月 1日(月) #3 原田 郁
- 7月 2日(火) #4 宮田 篤
- 7月 6日(土) #5 宮田 篤+笹 萌恵 (公開収録)  
 ゲスト: 渡邊早葉・野村勇作 (社会福祉法人みぬま福祉会)
- 7月13日(土) #6 飯川雄大 (公開収録)  
 ゲスト: 成田 久 (資生堂アートディレクター、アーティスト)

出展作家と担当学芸員が、作家の日常や展覧作品についておしゃべりし、その内容をYouTube ポッドキャストで配信。展覧会会期中、展示会場でも聴けるかたちとし、アーティスト・トークを聴きながらの作品鑑賞、鑑賞後の振り返りなどにも活用できるものとなりました。また、ゲストを招いた回では公開収録を実施しました。 [→ P.84-108 参照](#)



鑑賞サポーターとは  
 2023年12月から、東京都渋谷公園通りギャラリーで活動しているスタッフです。  
 ゆっくり、楽しく作品を鑑賞してもらるように、必要に応じて手話などのサポートを行っています。

# あなたにとって「日常」とはなんですか？

## 来場者アンケートより

日々、職場と自宅の往復。何事もなく朝起きて、夜眠ること。

不変であり、移り変わりゆくもの。

よく食べてよく寝てよく喋って働くこと。  
頑張りすぎないで、がんばる!!

繰り返しの中で発見と彩りを感じる毎日のこと

慣れてしまうもの。あると手放したくなり、ないと欲してしまうもの。

今日も勝手に始まるもの

平和な世界

いつもそばにあり つくっていくもの

“しあわせ”を見つけること“しあわせ”を  
味わうほど生きていると感じられること

30歳の私にとっての日常は、自身をいかに俯瞰できるかという課題との戦いです。楽しく日常をすごさなければいけないなんて決まっていはずなのに、楽しく過ごせるように頑張っています。それは見栄であったり、身についた習慣であったり、暗い時間が嫌いであったり、きっとこだわりが強いのでしょうか。

非日常までのつなぎ

「瞬き」一瞬一瞬が連続して日常に。  
常、この瞬間を大事に、生きる。それが、日常。

小さな感情があつまっている時間。

ご飯を食べて、寝ること。

ちょっとつまらなくて、ちょっとおもしろいもの。  
壊されたくないもの。

難しい質問… 答えが生まれませんでした。これを機に、考えてみます。

まったり過ごす時間

あたりまえにつづくと思っているもの。

自分にも、自分以外にも平等にあるもの、何が起ころうとも、どう過ごしても、それは個人の誰にもある毎日の中のひとつ、人生で見ると思い出せないような、でも確かに過ごした時間のこと。当たり前すぎて見逃してしまうもの。わからないな(笑)。

自分が楽しく過ごすことができること

衣食住の想定ができてじぶんのしっくりきている様。  
明日もわりと今日に近いかんじを思っている状態。

おちこんだり、うれしいと思うこと

「生」を実感するもの

幸せの連続

日常とは偶然と必然

うつりゆくもの

日々の営みの連続。幸せなこと、楽しいこと、むかつくこと、不幸せなこと良いも悪いも、ごっちゃまぜになっているから、日常飽きないでいられる。

そこそこの幸せ、不安なくねむりにつける日々

からだが無意識に動くくらい繰り返している生活のこと

あたり前にあるものでかけがえのないもの

成長過程。

猫をなでること。

幸せ♡

生きる

学び

よく食べてよく寝ること

一般に「日常」とは、「ほのぼのとしたもの」あるいは変わらぬもの、「ずっと続くもの」といったイメージがつかまとうものです。ただ、つらい記憶を辿ると一刻も早くこの「日常」が終わりを迎えてほしい、そして苦しむことのない「真の日常」を歩みたい、そう考えていた時期がありました。同時に、「そのような日常など本当に存在するのだろうか」とも考えていました。しかし、この世に変わらぬものがないということを前提とすれば、「日常」とは今、この瞬間の連続なのではないでしょうか。

どの様な形になるのかわからない時間  
前日と同じ事が長く続くこともあれば、急遽別のことも起きてしまう。「起きる」「動く」「寝る」の事柄を基盤として、その時の環境によってその日毎の行動が異なることを示す

時の流れを感じること。

生きること、笑顔で過ごすこと。

過去に置いてきたもの。

定義するのは難しい。ただそこに存在している事日々のくらしのルーティン、ターニングポイントとなるような出来事のないとき、なにげないとき、だけどそれを欠いては意味のない、味気ないものとなる。

ありふれたものかもしれないけど、  
何より大切なものです。

生まれてこの方、私を好いてくれる人にかこまれて生きてきました。愛という相互関係に常に身をおいて、幸せに育ちました。今後も同じだと思ってしまふ私と、これ以上ない幸福は有難いとする私が共存しています。私にとって日常は「守りたいもの」であり、「他者からの愛を受け取りながら生きること」です。

立ち向かうもの

「幸せとは？」とか「人生とは？」とか  
考えずにいられる毎日のこと。

いつもの朝いつもの昼いつもの夜

---

自由。

---

---

目に見えるすべて

---

---

ねる。

---

---

見られるもの

---

---

良くわからないけど、気付いたら続いているもの  
ポーっとしていたら、朝ごはんの時間がやってき  
て、またポーっとしていたら、お昼、おやつ、夜ご  
はん etc. と、ごはんによってリズムが刻まれて、ト  
ントントンと進んでゆきます。

---

---

新しい発見とエネルギーの連続

---

---

・いつの間にか過ぎて、振り返ると短く感じるもの。  
・遊園地のようなもの…心がおだやかな日はメリ  
ーゴーランドにのっている気分だし、激しく墜ち  
こんだ日はジェットコースターにのっている様な  
気分になるから。

---

---

当たり前じゃないはずの当たり前

---

---

起きて、食べて、寝る!

---

---

だいすきな人たちの横顔をみる瞬間

---

---

あたりまえだけどなくてはならないもの

---

---

「ふへん」

---

---

リズム  
続いていくもの

---

---

じかんがすぎてこわい 1日はやい  
くるしい もっとやりたいことをやる自分のじかん  
ほしいぜったいほしい

---

---

一生のほとんどの部分で、つみあげる人もいれば、  
やりすぎす人もいような時間

---

---

非日常の反対。  
常に変化しつつも維持したいとねがうもの。  
かわっているのに変わっていないと思うもの

---

---

あたりまえのように毎日が過ぎていくこと

---

---

恋のようにはかなく情熱のかつ生物のようなもの。  
今不自由なことなく生活できることに感謝しよ  
うと思う。

---

---

日々いつもできていることができること

---

---

日常ではないこと

---

---

今日一日が世界劇場だと感じます。

---

---

人を形成する全てを孕んでいる無自覚なもの

---

---

簡単にできる喜び

---

---

いつかなくなることを意識せざるを得ないもの

---

---

流れの様なもの、ただ漂流する

---

---

生きる事です

---

---

日常とは、非日常を輝かせるためのもの

---

---

小さな幸せを見つけること

---

---

変わってほしくない日々

---

---

当たり前で溢れていること、  
当たり前が当たり前でないこと

---

---

連続と非連続。  
意外で誰も予想していないものごとへの入り口

---

---

取り敢えず死なないこと

---

---

気付かないうちにすぎてしまう、  
でもかけがえのないもの

---

---

繰り返される暮らし

---

---

重ねるもの

---

---

無意識なもので、ふと意識が向くと面白いもの

---

---

変わらぬ一日を過ごし、  
最後に湯船に浸かってふかふかの布団で寝ること

---

---

取捨選択の連続

---

---

朝起きて自動的にやる事たち。

---

---

日々粛々と続けていくもの

---

---

更新されつつ安心感のあるもの

---

---

仕事と家。たんぱく、たまに楽しい非日常を味わ  
うための前戯。

---

---

変わらないもの、今の生活

---

---

わたしにとって日常とは、ただ幸せであってほしい  
ものです。刺激はいらない。ただ時間の経過に身  
体を合わせていきたいです。

---

---

環境で変化するもの。気がきが大切!

---

---

小さな喜び

---

---

光と影が対なこと

---

---

身の回りのちいさな幸せなこと

---

---

生きてきた道

---

---

当たり前にあって特別な色のない毎日

---

---

私にとっての日常は、ごく最近、淡々と送れるよう  
になったものです。でも、いまだに常にどこかがほ  
ころびていて、繻い続けるために落ち着きません。  
自分に手一杯で、他者の日常や自分の日常のパー  
ツ一つひとつに思いを馳せる余裕がないのかもしれ  
ない。この展示を見てそう思いました。

---

---

文化に触れ続けること

---

---

落ち着いて過ごす

---

Essay and Talk

エ  
ッ  
セイ  
・  
ト  
ーク

私たちは、毎日の風景を意識的にみているのだろうか。そこにある小さな変化に気づいているのだろうか。

私たちの日常は、SNSやテレビなどから目まぐるしく発信される新しい情報に溢れている。昨日の出来事を咀嚼するまえに今日には新しい出来事が起き、古い情報は次々と記憶の奥底にしまわれていくような感覚を覚える。そのような忙しい毎日を前向きにとらえるならば、日常は、毎日アップデートされているのではないか。それならば、能動的に周りを見ることでいままで気がつかなかった風景にはっとしたり、何かを想像したりすることで、受動的に目に映る景色とは違う、新たな風景を見ることができよう。その視野の広がりによって一日一日を豊かに過ごす手助けになるかもしれない。

6作家の作品を通して見えてきた「日常」の風景とは、どのようなものだったのだろうか。

関口忠司は、埼玉県にある福祉施設「工房集」所属の作家であり、工房集と同じ、社会福祉法人みぬま福祉会の入所施設「大地」で作品を制作してきた。入所当初は、自身の身体などの問題で気持ちが不安定な時期もあり、職員を困らせるようなこともあったようだが、「書」と出合ったことで、表現する楽しさを知り、世界も広がったようである。関口が書く文字は、丸みを帯びた温かみの感じられる書体で綴られている。その文字は、「人から好かれる才能があった」といわれる関口の人柄を表しているかのようだ。関口は、入所施設の職員の会話やテレビから聞こえてきたことばを書いていた。その聞き間違えがそのまま文字になって職員が面白い反応をみて楽しんでいたり。《せとうちじゃくそん》がその一つらしい。何の聞き間違えかは、説明しなくてもわかるだろう。なかには、施設での騒動を思い出し綴ったことばもある。《エレベーターさわざい》。いったい何があったのだろうか。

ことばで周りを和ます関口も、気持ちが落ち込む時には《かんおけ》など死を連想させるようなことばを書いていたこともあったようだ。職員にとっては、関口がその日書くことばは、彼のその日の調子を測るバロメーターとしての役割もあった。まさに関口の施設での日常がそのことばたちに詰まっている。

本展では、関口と同じ展示スペースを共有した出展作家の宮田篤、工房集、本展担当学芸員の三者で関口の展示作品を選定した。何れも関口の担当をしていた施設職員から当時の話を聞き、関口らしいことばを選んだ。展示では、関口や作品の背景などの

説明はしなかったが、観た人たちは、間違えられて綴られたことばや丸みを帯びた書体から関口忠司の人物像を想像してくれたのではないだろうか。その証拠に関口のことばに癒されたという声を多く聞いた。

高校生くらいから他者との違いに興味を持ち始めたという宮田篤は、もともとは絵画を学んでいたが、ふとしたことがきっかけで、人と人の違いを楽しく共有できる「しくみ」や「しかけ」の作品をつくり始めた。その作品の一つとして本展では、《微分帖》(p.10)を紹介した。微分帖の普及と発展のための研究活動、普及活動や交流事業などを行う架空の《びぶんブックセンター》を展覧会場に出現させ、センター内で微分帖のワークショップや各種イベントを実施した。その活動自体が作品そのものであり、交流スペースにできた《びぶんブックセンター》は、会期中多くの人でにぎわった。

《微分帖》とは、数名でつくるおはなしの小さな本である。一人目の文章に二人目、三人目…と新たな文章をはさんでいくことで、始まりと終わりは変わらないのに、想像もつかない展開が生まれる。生活環境や背景、性格、年齢などの違いによって、ものの見方も感じ方も違うはずなのに、重ねられた文章は、不思議と一つの物語になっているのだ。知らないもの同士が、同じ時間を共有し、その時間だけ、知らないその人の文章から人物像を想像する。実際にその作業に参加してなくても完成した《微分帖》を読むと物語としても楽しいし、本当かどうかはわからないが、個人的なお話を書いてあったり、《微分帖》がつくられた地域のお話が登場したりして、人とのつながりが感じられる。また《びぶんブックセンター》では、前述した関口忠司と宮田篤のコラボレーション「びぶん書」も実施された。関口の作品《ときはすぎゆくまに》の間にことばをはさむものである。関口のことばが、他者のことばをはさんで新たなことばとしてアップデートされていた。

私たちの日常は、災害や事故、感染症や戦争などで一瞬にして一転してしまう危うさをはらんでいる。ユ・ソラは、企画「すいか、トマト」(FOAM CONTEMPORARY、東京、2024)のアーティストステートメント<sup>1</sup>の中で、「私たちの身近な所で、そして自分にもそんな日が来るかもしれないという不安と恐怖が常に心の奥にある。」と語り、さらに「子が生まれ、1歳になった。新しい幸せの裏に、新しい不安も芽生えた。守りた

いものが増えると恐れるものも増えていく。」と続けている。

そんな不安な気持ちからなのか、日常の大切さを問うユの作品は、色が無いにもかかわらず、いや、色が無いからこそ、どこかほっとする安心感がある。特定のどれかの色に染まっていない部屋には、乱雑に積まれた本や床に落ちてそのままになっているレシート、テーブルに放置されているコップや牛乳パックなど、誰にでも共感できる風景がある。ユが街を歩きながら見ていたベランダに干された洗濯物、SNSで流れてくる誰かの日常生活など、いろいろな人たちの日常を重ねた空間である。見覚えのある風景が彼女のインスタレーションによって、誰かの日常の風景とオーバーラップする。ユは、家族や恋人、友達同士で、作品を観ながらそれぞれの日常を語り合っほしいと言った。

会期中、人が近づくとかすかに揺れる黒い糸、白いソファに置かれた壁掛け時計は、現在（2024年）の時を刻んでいた。この時を大切にという作家からのメッセージなのかもしれない。

土谷紘加は、2015年から大阪の特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナスでアイロンビーズの創作を開始した。それから約9年、その枚数は2500を超えたそうだ。1日に3枚程度つくられる《COLORNY》（カラニー）は、似たような作品はあるが、一つとして同じものはない。それは、私たちの毎日と同じではないだろうか。似たような過ごし方をする1日はあれど、同じ昨日、今日、明日はない。

土谷は、制作にとりかかる前から作品の完成図がイメージされているのか、アイロンビーズの型にビーズをさす手に迷いはない。アイロンの熱の当て方も彼女のその日の感覚によって違う。できあがった作品は、大事そうに胸に抱き、匂いを嗅ぎ、指ではじいて感触を確かめているようなそぶりを見せる。色については、黒がゴマプリン、赤がいちご、青や白がバニラアイスなど土谷の好きなものに置き換えられているのか、そのように答えてくれる。《COLORNY》には土谷が過ごしてきた施設の仲間や家族との、特別ではないが、とても身近で大切な日々が閉じ込められているのかもしれない。

若い世代には、なじみのあるアイロンビーズ。10代、20代の来館者の多くが、懐かしさとともに鑑賞している姿を見かけた。中にはこれをきっかけに再びアイロンビーズを始めてみようかという声もあった。土谷のアイロンビーズが、他者に影響を与えた瞬間だ。きっとその鑑賞者は、土谷のささやかな日常が詰まった《COLORNY》から自身を

包み込むあたたかさを感じたのだろう。

原田郁は、コンピューター内に架空の世界をつくり、その中で彼女が見た風景を現実世界のキャンパスに置き替え絵画を制作している。この《inner space》という作品は、原田が悩んでいる時に自身のユートピアとして、自らの居場所として制作をはじめた作品である。仮想と現実を行き来する出入口のような作品といわれることもあるが、展覧会を重ねるごとに、個人的だった世界はスペースが増え、外にも開かれていった。仮想世界を通して原田が他者と触れ合う、自身の心の出入口のような作品でもあると言えるのではないだろうか。

本展でも仮想世界を通して鑑賞者と交流を行なった。鑑賞者が窓の絵を描くワークショップ「共感の窓際」(p.54)である。鑑賞者が描いた窓の絵は、仮想世界《inner space》内のギャラリーに展示し、会期中のみ映像公開をした。原田のシェルターだった場所が、また一つ他者の存在によってアップデートされた。このことについて原田は、「ひとりで生きていけない以上、自然なこと」と答えている。<sup>2</sup>

映像と絵画で構成された今回の展示では、仮想と現実を行き来するように、鑑賞者が映像と絵画を行き来して鑑賞していた。ある人は原田の作品を観て、郷愁を覚えたと言った。実はこの仮想世界は、原田の生まれ故郷である山形県の盆地や最上川の景観をベースにつくられている。力強い色彩の中に流れる静かで、心穏やかな空気がそのような想いを起こさせたのだろう。

《inner space》は、スペースを広げ、アップデート（更新）とアーカイブ（記録保存）を続けていく。

建物の窓から飛び出たり引っ込んだりする水色の直方体。その下を行き交う人たちは、その不穏な風景に気づかない。気づくどころか、上を見上げる人はいない。飯川雄大の《デコレータークラブ—0人もしくは1人以上の観客に向けて》だ。展示室にあるハンドルを回すことで水色の物体は動く。当たり前だが、ハンドルを回さない限り、その物体は動かない。右に回すと窓から飛び出し、左に回すと元に戻るしくみである。すぐそばの窓辺から外をのぞけばその様子が見えるのだが、ハンドルを回す者にはそれができないという絶妙な配置がなされていた。一人では探せないし、見えない、そんな作品からは、その様子を見守っていた他の鑑賞者と、回すことを促していた看視員との間に交



流が生まれることとなる。《デコレータークラブ—Pulling Time》は、壁から飛び出しているロープや紐を引っ張る作品である。紐やロープは、引っ張るとそのままの状態になり、ある瞬間誰かがどこかでその紐やロープを引っ張り返して戻っているので、ハンドルと同時にロープや紐を引っ張る鑑賞者がいると、そのつながりを疑う人が多くいた。

《デコレータークラブ—新しい観客》(p.64)では、鑑賞者が飯川作品《ベリーヘビーバッグ》を外に持ち出し、同時期に彼の展覧会が行われている別の会場に運ぶものだ。その道程を知るものは、運んだ人と作品のバッグのみである。細かいルールはあれど、借用側(鑑賞者)と貸出側(美術館など)の信頼関係で成り立つこの作品は、人との関係性と、飛行機では重量オーバーで追加料金がかかったり、バスの乗り降りが大変だったり、ちょっとした段差も辛かったりと社会との関係をも感じさせる作品だった。

このように人の存在によって作品が成り立つ飯川の「デコレータークラブ」シリーズは、鑑賞者に想像すること、考えることを促した。彼らは、まるで謎解きのように答えを求め展示室内を右往左往し、ハンドルにつながっているその先、ロープの終わり、紐の行方を考え、想像しただろう。そして思いもよらない答えに出合った時に視野の広がりを得たのではないだろうか。その体験によって、渋谷の街の風景も来た時とは違って見えたはずである。

本展を通じて、意識的に見た風景はどうだったのか。各作家の作品からは、それぞれ人とのつながりが見えた。具体的にその姿は見えなくてもその存在を感じることができた。関口忠司と土谷紘加の作品からは、彼らをサポートする施設の職員や家族との日常が感じられた。飯川雄大と宮田篤の作品は、その見え方が体験者の関わり方によっても変化するものだった。ユ・ソラと原田郁は、作品を通して間接的な交流を鑑賞者に行った。鑑賞者と看視員、鑑賞者と鑑賞者など、あちらこちらで交流の連鎖が本展にはあった。原田が言うように人は一人では生きていけない。人と関わらざるをえないこの日常の中で、少しでも毎日が豊かになるといい。本展では、人と人とのあたたかい交わりの風景が広がっていた。

1.銀座書店葛屋ウェブサイト、[展覧会]YU SORA個展「すいか、トマト」ページ、閲覧日2024/10/16  
<https://store.tsite.jp/ginza/event/architectural-design/41235-1605120626.html>

2.田中糸れ奈「変化が伝える 他者の存在 グループ展『日常アップデート』」、朝日新聞、2024年8月20日(火)、夕刊、4版、3面

How consciously do we observe our daily surroundings? Do we pick up on minor changes all around us?

Our everyday lives are now saturated by a constant torrent of new information from social media and television. New events occur before we have a chance to digest the events of yesterday, and it feels as if old information is being constantly buried deeper in our memory. If we put a positive spin on this hectic everyday reality, we can say our lives are being updated day after day. In that case, active observation may cause us to be startled by scenery we had never noticed, and turning our imagination to the world around us can reveal different things from what we see passively. This broadening of perspective may help us to spend each day in a richer way.

What scenes of the everyday were revealed by these six artists' works?

SEKIGUCHI Tadashi is an artist who belongs to KOBO-SYU, a social work institute in Saitama Prefecture, and has created works at Daichi, a residential facility run by the same Minuma Social Work Association that operates KOBO-SYU. When he first entered the facility, there were times when physical or other issues caused him to become emotionally unstable and trouble the staff. But after encountering calligraphy, his world expanded as he learned the pleasure of expressing himself. Sekiguchi's calligraphy has a rounded appearance that conveys warmth. Said to be well-liked by others, Sekiguchi's characters seem like an expression of his personality. He wrote words that he overheard from conversations among the facility's staff or from television. Apparently, he enjoyed seeing the staff's amusement when misheard words were put down on paper. *Setouchi jackson*, a mixture of the names of a Buddhist nun and Michael Jackson, is one such example. Some words, such as *Elevator fuss*, were written down from the recollection of disputes at the facility. We can only imagine what occurred.

Sekiguchi, who usually uses words to comfort those around him, would sometimes write words that evoke death, such as *Casket*, when he was feeling down. For the staff, Sekiguchi's calligraphy served as a daily barometer of his state of mind. These words truly record Sekiguchi's everyday life at the facility.

Sekiguchi's works in this exhibition were selected by Miyata Atsushi, one of the exhibiting artists who has shared exhibition space with Sekiguchi; KOBO-SYU; and the exhibition curator. All of them spoke to facility staff who were caring for Sekiguchi at the time, and selected words that are characteristic of Sekiguchi. Although the background of Sekiguchi and his works was not explained at the exhibition, visitors may have gotten

a sense of what kind of person he was from the mistakenly spelled words and rounded writing. In fact, many visitors commented that they were healed by Sekiguchi's words.

**MIYATA Atsushi** says he began to take interest in differences with others when he was in high school. Having originally studied painting, by chance he began to create works that offer ways to enjoy sharing the differences between people. This exhibition introduced one such project, known as *Bibun Book* (p. 10). The exhibition space hosted the fictitious *Bibun Book Center*, dedicated to research, promotion, and exchange in order to share and develop *Bibun Book*. The *Bibun Book Center* in the gallery's interactive space bustled with visitors who participated in various workshops and events during the exhibition. This active space itself is the artwork.

A *Bibun Book* is a small book composed by several people. Each person adds a new string of words to the middle of whatever the person before them wrote. The beginning and end never change, but the story takes unexpected twists. Each person inflects the story with their different environment, background, personality, and age, but despite different ways of seeing and feeling things, the nested sentences strangely coalesce into a single story. Strangers share a moment together, and only in that moment, the writing lets them imagine who others might be. A completed *Bibun Book* can be enjoyed by others who did not participate in its creation and read as a story, often filled with personal tales, true or not, and parts about the local place where the *Bibun Book* was created. At *Bibun Book Center*, Miyata Atsushi also collaborated with Sekiguchi Tadashi, introduced above, to create a work of "bibun calligraphy." Words were inserted into Sekiguchi's calligraphy *As time goes by*, updating it into new words through the insertion of characters by others.

Our everyday lives are always at risk of being turned upside down at any moment by disaster, accident, pandemic, war, or other disruptions. In her artist statement for her solo exhibition "Watermelon, Tomato" (FOAM CONTEMPORARY, Tokyo, 2024), **YU Sora** wrote, "There is always a fear or anxiety in the back of our minds that one day, such a misfortune could strike close to home, or even ourselves." She continues, "I gave birth to a child who is now one year old. Beneath this new happiness, new fears stir. The more things I want to protect, the more things I fear."<sup>1</sup>

Perhaps reflecting such feelings of anxiety, Yu's works probing the preciousness of the ordinary are colorless. Yet it is precisely their colorlessness that makes them some-

how comforting and reassuring. Set in a room that is not tinted by anyone's particular color, her work depicts a scene that anyone can relate to: books stacked in messy piles, receipts scattered on the floor, cups and a milk carton left on the table. The everyday lives of many people are layered in the space, from the laundry drying on a balcony that Yu spotted during a walk, to a streamer's daily life encountered on social media. Scenery that we are all familiar with overlaps with others' daily lives through her installation. Yu said she hopes her work prompts families, couples, and friends to talk about their own everyday lives.

During the exhibition, black threads swayed softly whenever someone approached, and a wall clock on a white sofa ticked away the hours in the present (2024). Perhaps this was the artist's message to cherish the present moment.

**TSUCHITANI Hiroka** began creating artwork using perler beads in 2015 at atelier Corners, a non-profit organization in Osaka. In the nine years since then, she has created more than 2,500 works. In a single day, she can make around three of her *COLORNY* designs, and while they look similar, no two are alike. In a way, this is similar to our daily life. We spend many days in similar ways, but yesterday is never the same as today or tomorrow.

Tsuchitani seems to have the finished work in her mind before she starts to create it, and does not hesitate as she places the beads onto the ironing board. The way she applies heat with the iron depends on how she feels that day. She gently holds her finished work to her chest, sniffing it and flicking it with her fingers as if to confirm its texture. In her telling, the colors stand in for things she loves—black for sesame pudding, red for strawberries, and blue and white for vanilla ice cream. Tsuchitani's *COLORNY* works contain a part of her ordinary, yet intimate and precious days, spent with her friends and family at the facility where she has lived.

Younger visitors were most familiar with perler beads. Many visitors in their teens and twenties viewed the artworks with apparent nostalgia. Some even said it inspired them to try perler beads again. In such moments, it was clear Tsuchitani's artworks had impacted others. Visitors likely felt warmly embraced by the small everyday happenings contained in Tsuchitani's *COLORNY*.

**HARADA Iku** has created an imaginary world on her computer, and paints scenery she sees there on real-world canvases. Harada initiated this project, known as *inner space*,

as a kind of utopia or personal place of refuge during a time when she was feeling troubled. It is sometimes described as a gateway between the virtual and real worlds, but through numerous exhibitions, this world that was once Harada's private realm has been filled with more spaces and opened up to the outside world. Serving as a place where Harada interacts with others via a virtual world, this work could be described as an entry into her own mind.

This exhibition also included an interactive element between Harada and visitors in the virtual world. Participants in the "Window of Empathy" workshop (p. 54) were invited to create pictures of windows. These pictures were displayed in a virtual gallery within *inner space* and presented on screens during the exhibition. This place, once a shelter for Harada, was updated through the presence of others. When interviewed, Harada described this as "something natural, as we cannot live alone."<sup>2</sup>

In this exhibition comprising video screens and paintings, viewers went between one and the other as if moving between the virtual and the real. One person said that Harada's work had made them feel a sense of nostalgia. In fact, her virtual world was based on the landscape of the Mogami River basin in Yamagata Prefecture, where Harada was born. The quiet and peaceful atmosphere present amid the bold colors may have evoked such a response.

*inner space* will continue a process of adding more spaces, updating, and archiving.

A light blue rectangular object pops in and out of the window of a building. People passing by underneath do not notice this unsettling scenery. Not only does nobody notice, no one even looks up. This is **IIKAWA Takehiro's** *Decorator Crab – Expecting Spectators*. The light blue object moves when, and only when, visitors turn a handle in the exhibition gallery. Turning the handle to the right causes the object to protrude out of the window, while turning it to the left causes it to return to its original position. The result of turning the handle can be seen from the nearby window, just out of sight of the person at the handle. The artwork thus cannot be found or seen alone, and spurs communication with other visitors who may have seen the result, as well as the gallery staff who encouraged the person to turn the handle. *Decorator Crab – Pulling Time* is a work in which the viewer pulls on ropes and strings coming out of the wall. The strings and ropes remain slack, until suddenly someone somewhere pulls the string or rope back. When a visitor pulled on a rope or string at the same time that someone else turned the handle, many people wondered if there was a connection.

In *Decorator Crab – Make Space, Use Space* (p. 64), visitors may take Iikawa's artwork *Very Heavy Bag* outside the venue and carry it to another venue where one of his exhibitions was being concurrently held. The only ones who knew how the journey unfolded were the person who carried it and the bag itself. While there are detailed rules, this artwork depends on a relationship of trust between the borrower (the viewer) and the lender (the museum or venue). This work reminds us of our relationship with people, as well as aspects of our relationship to society, such as airline fees for overweight luggage, the difficulty of getting on and off buses, and even slight differences in floor level.

Because these artworks are made possible by the presence of people, Iikawa's "Decorator Crab" series encouraged visitors to imagine and think. They would move around the exhibition room in search of answers to the riddles, thinking and imagining what is connected to the handle or the end of the rope, or where the string goes. They may have felt their perspective broaden when they found an unexpected answer. Their experience likely gave them a different perspective on Shibuya than when they came.

What scenery could be seen consciously in this exhibition? Each artist's work revealed connections with others. Even if not visible in concrete form, their presence could be felt. Sekiguchi Tadashi's and Tsuchitani Hiroka's works let viewers feel their everyday relationships with the facility staff and families who support them. The way people saw works by Iikawa Takehiro and Miyata Atsushi changed depending on how they interacted with them. And Yu Sora and Harada Iku engaged in indirect interaction with visitors through their works. A chain of interactions took place throughout this exhibition, including between visitors and the gallery staff, as well as between different visitors. As Harada says, we cannot live alone. In our everyday lives we must interact with others, and it would be nice if each day could be enriched, even if only a little. This exhibition was full of scenes of warm interactions between people.

1. Ginza Shoten Tsutaya website, [Exhibition] YU SORA solo exhibition "Watermelon, Tomato," accessed 16 Oct. 2024. <https://store.tsite.jp/ginza/event/architectural-design/41235-1605120626.html>

2. Tanaka Erena, "Group exhibition 'Imagining the unseen everyday' conveys others' lives through change," 20 Aug. 2024, *Asahi Shimbun* (evening edition), p. 3.



**宮田 篤**  
「出会い」と「ずれ」から広がる世界

——本日のゲストは宮田篤さんです。早速ですが自己紹介をお願いします。

**宮田:** 絵画や彫刻とは異なる、「しくみ」や「しかけ」としての作品をつくっています。皆さんが参加いただくことで何かができあがり、それをまた別の方が見ることになるような活動を、展覧会やワークショップで行っています。

今回は《微分帖》という作品で参加しています。これは、お話を複数人で作っていきけるしくみ自体が作品です。2つ折り、4ページにした紙を基本要素にして、1番目の人が書いたお話ができると、2番目の人がその中央に新たな4ページを挟んで話をつなげます。そうして前の人が書いたものを受け取り、つなげることで予想外の展開のお話が生まれます (p.19 参照)。ですから、そこに居合わせた人とお話を作ったり、そうしてできあがった本が読めたりするという「作品」もしくは「場所」をつくっていることになります。

——《微分帖》は2008年から始まったそうで、きっかけはあったのですか。

**宮田:** 愛知県立芸術大学では油画専攻で、ずっとペインティングを描いていたのです。僕にとって絵とは、白いキャンバスにいきなり筆を走らせるわけにもいかないもので、作品の種みたいなものが必要でした。それで、絵をつくるための自分なりのしくみやしかけを探っていたとき「あれ？このしくみやしかけがそのまま作品になるのでは」と思ったのです。そこから、身の回りのものの成り立ちや構造などを作品に転用できないかと考え始めました。

《微分帖》は、複数の紙をホチキスで中綴じにした本と同じ構造をとっています。あるとき雑誌を分解して、バラバラになったページたちを見たとき、パツとひらめきました。それまでも複数人で何かをつくるしくみは、ワークショップなどで取り入れていました。そこにこのページの成り立ちを活か

すことで、参加者がアイデアを持ち寄る土台になると気づいたのです。実際にやってみたら、面白いし、構造はシンプルなので、当時のアイデアのままで続けています。一方、そこでの自分の立ち位置や考え方には変化もあり、多様な解釈ができるなと思っています。もう15年ほどいろいろな場で続けてきて、できあがった《微分帖》は1000冊以上、携帯電話やSNS上でつくったものも合わせると2000冊以上あると思います。

**人々が出会い・創造する場をつくる**

——第1号の《微分帖》のことは覚えていらっしゃいますか？

**宮田:** はい。家に遊びに来た友だちを誘ってつくったのが最初です。スーパーで何かを買いに行ったのが最初で、スーパーで何かを買いに行った、みたいな話をつくって、これが自分としてはめっちゃ面白かったのです。翌月に絵画作品による個展を開いたのですが、僕自身も2週間会場に通い、絵を見に来た人たちに「最近こういうことをやっているんで、一緒につくってみませんか」と声をかけ続けました。ギャラリーの隣が本屋で、たまたま個展タイトルも「としよ感」にしているので、そこまで変じゃないかなと思って。

するとみなさんが、少し驚きつつも楽しんで参加してくれたのです。《微分帖》をつくると、ふだんの会話で生まれるコミュニケーションとはまた少し違うせいか、知らない人も何かが通じ合う感じがあります。募集に応じて集まってもらうワークショップとも違い、たまたま居合わせた人同士の出会いが、ひとつの本、お話になるのも面白い。今も絵を描かないわけではありませんが、以来、活動の軸がこうしたものにゆっくり移行していきました。日常がそうであるように、ゆっくりと変わっていき、後で気づくことがあると思うのですが、自分にとってはそういう変化でした。

画家はアトリエでキャンバス上に絵の具を使っ

て描きますが、今回の展覧会でいえば、東京都渋谷公園通りギャラリーの展示室につくった「びぶんブックセンター」が僕にとってのアトリエです。この場所でキャンバスではなく来場者に向き合い、テーブルを囲んでワークしてもらったり、誰かがワークシートにちょっとしたことを書いてくれたりするの、僕にとっての「制作」だと考えています。同時に大切にしているのは、お客さんが無理に参加していただく必要はないですよ、ということです。

——できあがった《微分帖》は、まるで短編小説のようなものもありますね。

**宮田:** ありがとうございます。正面切って文学でございとは言いきれないのですが(笑)、キャッチコピーみたいなものとして「おとなも子どももあそべるぶんがく」というのがあります。

——一方で、違う人のことばが挟まっていくことで「こんな展開にしちゃったの??」みたいな予想外の変化も多く起きていそうです。

**宮田:** そうですね。関連して、手書きでつくることが多いので、それぞれの字の色や筆跡、大きさ、リズムなども関わっていると思います。これは実物を手に取っていただくとよくわかります。また、「クオリア」という言葉があって、例えば「赤」「黄色」「ライオン」など何でもよいのですが、ひとつの言葉にまつわるイメージの世界も、じつは人それぞれで違う。赤といえば信号を思い浮かべる人も、血の色を連想する人もいて、これは人生経験からの違いなどもあるのでしょう。でも《微分帖》では、相手の言葉に自分の言葉を付け足すのではなく、間に「挟み込む」。つまり、一度相手を受け入れたうえで、相手の言葉につなげていく。すると、言葉はつながっていくと同時にずれてもいきます。それが笑いや、ふだんのおしゃべりでは気づかな

いようなコミュニケーションを生むのかなと思って  
います。

### シンプルなくみから広がる可能性

——《微分帖》には、漫画や詩を使った試みもあり  
ますね。

宮田:《微分帖》はシンプルなくみなので、解釈  
次第でいろいろな広げ方ができそうだなとは、早  
い段階で感じていました。本職の漫画家さんに描  
いてもらったのは2010年の広島市現代美術館で  
のプロジェクトが最初で、今回も参加してくれて  
いる、もぐこん先生とつくったものを作品として展  
示しました。

今回は初の試みとして、来場者が漫画家の先生  
方(もぐこん、ひうち棚、こいけぐらんじ)との「び  
ぶんまんが」に挑戦できます。チャレンジしてくだ  
さる方が結構多くて、しかも上手なので驚いて  
います。ふだん僕が会場にいるときは参加者の方  
々に記念のステッカーやポストカードを差し上げ  
ているのですが、不在のあいだにできあがったもの  
を見たら「これはすごいレベルだ、特製キャップ  
かTシャツを差し上げた可能性があるぞ」というも  
のもありました(笑)。

——今後も新しい展開を考えていますか?

宮田:「微分詩」はまだ作例が少ないのもっと  
やってみたいです。また今回、同じ展示室の奥で  
関口忠司さんが書の作品を出しておられますね。  
もちろん書そのものをじっくり見て、なぜこう書  
いたのか、どう書かれたのかに思いを馳せるのも正  
統な鑑賞のあり方だと思うのですが、「この書を  
《微分帖》の間に挟んでみたらどうなるかな」と想  
像するようなことも、今回ここでしかできない鑑賞  
の仕方になるかもしれないと思いました。

また、びぶんブックセンターで来場者に対応して  
くださるスタッフさんのなかには、手話ガイドがで  
きる方もいます。そうしたこともあって先日、手話  
としての《微分帖》があり得るならどんなものかと  
皆で話したとき、ある方が、ページが移り変わるタ  
イミングを手話で示す動作として、足のステップを  
使っていたのですね。ページが進むとサイドステッ  
プを1個入れる、みたいな。こういうやり方もある  
のだな、と感動しました。

さらに今回、日中英の3か国語表記で《微分帖》  
を作ってくれた方もいて、さまざまな作例が増えて  
いくのも楽しいです。ギャラリーのご協力で英語  
版説明文もつくれましたし、中国語版もできました。  
以前に韓国語でつくったこともあり、そうした広が  
りも嬉しいですね。つくる場所の特性からひらめ  
いたことはやってみたいし、《微分帖》とはこうい  
うものだと決めつけず、柔軟に広げて研究してい  
きたいです。

——宮田さんにとって《微分帖》はもう「研究」なの  
ですね。

宮田:そうですね、特に今回は会場を「びぶんブッ  
クセンター」としたので(笑)。その前の展示では  
本屋さんの体(てい)で会場を「びぶんブックス」  
と名付け、「新刊を皆さんで作りませんか」という  
呼びかけ方をしました。今回は、会場の向かいに  
ある渋谷パルコに以前「ブックセンター」があった  
のを思い出し、あれはひとつの文化センター的存  
在だったのではと考え、この言葉を借りて名乗っ  
てみました。今後さまざまな地域で「ブックセン  
ター」を開くのも楽しいかと思っています。

### 他者との違いを楽しみながら考える

——《微分帖》のほかにもいろいろなくみやしかけ  
に取り組んでいるのですか?

宮田:例えば《ちくちく地区》(宮田篤+笹萌恵、  
2010-)は、2人以上のグループで、互いにフェル  
ト素材で文字を切り取るところから始まります。ひ  
らがなで「い」を切り抜くと、それぞれフェルトの  
色が違うだけでなく、同じ字でも人によって形が  
違ってきますよね。当然それらを重ね合わせよう  
とすると、絶対にピタリとは合わない。でもそれら  
を糸などで1枚のフェルトに、いわば無理やり  
縫い合わせてもらいます。すると、ずれや重なり  
や縫い目が模様になってその言葉の旗ができる  
というものです。他者との違いやずれなどをどう乗  
り越えて1枚の旗にしたのか、というのが縫い目と  
なって残るので、それを掲げて展示して、みんなで  
見るということをしています。

《間人間》(かみごたえの会、2017-)は僕ひとり  
ではなく、あるワークショップチームで生まれた  
ものです。3、4人で行うもので、そのなかの2人  
がペアになり、残りはオブザーバー役です。そのう  
えで、ペアになった2人の間に「間人間」という存  
在がいると仮定するのですね。「間人間」は、た  
とえば竹野さんと宮田がペアなら、すべてにおい  
てこの2人のちょうど真ん中にいる存在です。年  
齢も、好きな食べ物も、出身地も真ん中。性別に  
ついてはまだちょっとこの言い方で良いのか、わか  
らないのですけれど……。

例えば年齢は、20歳と40歳なら間は30歳で  
すねとか、出身が静岡と東京なら、間は神奈川ぐ  
らいかな?とか。それで2人が納得すればよいし、  
地図を引っ張り出して中間地点を探してもよい。好  
きな食べ物や好きな本は「間」がなかなか難しい  
のですが、10分くらい話していると、結構見つか  
るものです。パーベキューとお刺身の間は焼き牡  
蠣とか(笑)。これらをオブザーバーも参加して話  
し合い、そのペアにとっての「間人間」のプロフ  
ィールシートをつくるというものです。そこでは、両  
側から超えられない壁を掘り進んで出会うような感  
覚があり、互いに納得できる瞬間には、場がパンッ

と弾けるような感じがあって面白いです。

——互いが納得できるところへ到達するまでの過程  
に、面白さがありそうですね。

宮田:おっしゃる通りですね。人と人の違いには  
ずっと関心があります。誰もが当たり前知っている  
はずのことで、僕とあなたはこんな風に違  
いますね、と実感できる場面は多くない気もしま  
す。ですから自分としては、作品を通じてそれを感  
じることへの関心があります。

——形として残るもの以外に、例えば音だけで何か  
をするようなこともありますか。というのも、宮田さ  
んの作品はさまざまな人が参加できるのが特徴だと  
思うからです。言葉に関していうと、例えば聞こえな  
い方、文字が書けない方、あるいはさまざまな事情  
で発言そのものが難しい方もいらっしゃるかもしれ  
ません。そうしたことを超えていける表現も生まれ  
てくと素敵だなと感じました。

宮田:例えば「音」で言うと、《微分帖》の朗読な  
どはやったことがあり、いろいろ試行錯誤しなが  
ら掘り進んでいけたらと思っています。また、《間  
人間》をやっても感じますが、相手との間で  
本当に納得できる「真ん中」なんてない気もするの  
です。毎回「これは無理だろう」と思い、実際そう  
いうことも起きますが(苦笑)、突然パッとお互い  
のトンネルが通じる感じで「あ、ここちょうど真ん  
中じゃん!」となる時がある。その意味では僕の作  
品も、自分がずっと考え続けてきたこと、もしくは  
興味関心を持っていたことに、別の誰かが来てく  
れることで互いに掘り進められたら、もっと広げら  
れるかなと感じます。自分の側からだけでなく、相  
手と両側から考えると面白いし、ワクワクしますね。



## 関口忠司と宮田篤 + 笹萌恵

共感と驚き——それぞれの日常から

ゲスト：渡邊早葉・野村勇作（社会福祉法人みぬま福祉会）

——今回は本展の同じ展示室で発表している故・関口忠司さんと宮田篤さんをめぐるトークを公開収録でお届けします。ゲストには、関口さんが所属した社会福祉法人みぬま福祉会の渡邊早葉さんと野村勇作さんをお迎えしました。また、宮田さんはあいにく都合がつかなかったのですが、共に活動している笹萌恵さんがいらしてくださいました。まずは渡邊さんたちから、みぬま福祉会についてご紹介願えますか。

渡邊：みぬま福祉会は、障害者福祉を中心とした事業を行っています。1984年に埼玉県で創設され、当時、養護学校卒業後の行き場がなかった方々のために、その家族や先生たちが立ち上げたのが始まりです。そこでは仲間たち（利用者）が余暇活動を中心に、軽作業の仕事もしていました。一方、そうした作業も難しい、または拒否するような仲間ができることを模索するなかで「表現活動」が始まりました。

あるとき、軽作業のできない仲間のひとりにお祭りのチラシに絵を描いてみないかと声をかけたんです。するとすごく楽しそうに描いてくれて、これがきっかけでした。いまは全利用者の約300人のうち150人によって、絵画、機織り、ステンドグラス、木工、陶芸など、日々さまざまな表現が生まれています。現在、こうした表現活動は同法人内の施設「工房集」（こうぼうしゅう）を中心に行っており、関口さんは重い障害のある仲間の入所施設「大地」で書に取り組みようになりました。

野村：僕はその大地で入居者支援の仕事をしています。関口さんの創作は、いつも面白いこと書いてるなという感じで見ていました。大地は入所型の生活施設でもあるので、今日は関口さんの仕事以外のエピソードもお話できたらと思います。

——ありがとうございます。続いて、宮田篤さんとユニットで活動している笹萌恵さんです。

笹：私と宮田はそれぞれ個人で活動しながら、2010年くらいから2人での活動もしています。今回は、宮田が会場で開催している「びぶんブックセンター」に運営の役割で参加しています。2人ともワークショップでいろいろな人と何かをつくることが多く、その「しくみ」や「しかけ」を考えることから行っています。今回の「びぶんブックセンター」は、《微分帖》というワークショップの発展と普及を目指すというコンセプトで、文化センターの「ふり」をして展開しています。自分たちの作品をきっかけに、参加者のみなさんの間で重なる部分や、ちょっとずれる部分が見えてくるのが面白いと思っています。

### 間違いや失敗にも楽しさを見出す

——関口さんは残念ながら昨年お亡くなりになりましたが、ぜひお人柄などをうかがえますか。

野村：僕が関口さんと出会ったのは、10数年前、大学の実習で「大地」にお世話になったときです。人懐こくて、誰にでも話しかけるような人でした。実習中もいろいろ学ばせてもらい、その後も「お散歩に付き合っ」といった連絡がきて、彼に頼まれると「しょうがないな」という気にさせられちゃう、そんな人でした。

やがて僕も大地で正式に働き始め、関口さんがいろいろ武勇伝を繰り広げている人だと知りました。例えば、今回展示された書のひとつに《エレベーターさわざ》がありますね。大地では月に1回ほど、業者点検で「エレベーターを1時から2時までは使わないでね」という日があります。そういうときに関口さんがいなくなって大騒ぎしていると、点検が済んだエレベーターから出てきたのが関口さんでした。またふだんから、おイタをして怒られた話を楽しそうにするのですね。「コテンパンに怒られちゃったよ。あ、コテンパンっていいな、書いて

てみよう」という感じです。

ときには聞き間違いや書き損じが作品になることもあります。《つまがいた》はその背景をいろいろ想像させるのですが、実は「つまぎいた」の書き損じでした（笑）。でも彼は「つまがいた、いいね」と言っ。他にもテレビで「汚職事件」という言葉を聞いて「おしょくじけん（お食事券）か、いい響きだな」と書いてみたり。そうした彼の人となりが見られている作品も多いと思います。

——今回、宮田さんと笹さんには、関口作品と同じ空間でコラボもしていただきました。

笹：この展覧会において、宮田には自分の展示空間を架空の文化センターにするというコンセプトがありました。そこで関口さんとのコラボレーションも、この「びぶんブックセンター」における交流事業という位置付けにしています。そこからいろいろなアイデアも出ましたが、やはりシンプルに関口さんの書を受け止めたいとなりました。同じ展示室でこそできる体験として、関口さんの書の言葉のあいだに、私たちが書を加えていく「びぶん書」をつくる試みにたどり着いたのです。

《微分帖》は4つに分けたページをベースにつくっていくので、関口さんのシンプルで力強い言葉を分けることの難しさもありましたが、今回は《ときはすぎゆくまに》を選ばせていただきました。おそらく「時の過ぎゆくまに」という歌からきて、「の」が「は」になるのも関口さんらしきかなと思ったのですね。そこに宮田と私で言葉を加えさせていただきました。できれば会期中、皆さんにも関口さんの書に飛び込んでいただくイベントを用意できたらと思っています。

### 自分、そして他者と向き合える表現

——今回は関口さんのたくさんの作品から、工房集

さん、宮田さん・笹さん、そして私が、それぞれ選んで展示してもらいました。まず工房集で選んでいたものを読み上げてみます。《ふめつ》《まくれ》《じんとく》《であい》《なごむ》《ぎんが》《むがむちゅう》《ちゅうぶらりん》《なるしかならない》《どんびしゃり》《のうてんぎ》《すいへいせん》、そして《まぼろし》《はるかかなた》《つぶやき》です。

**渡邊：**関口さんはいろいろ問題を起こしても、とても愛されるキャラクターの持ち主だと聞いていましたので、そうした人となり伝わればと思いながら選んでみました。関口さんにもいろいろな面があると思うのですが、今回は彼の前向きな言葉というか、そういうものを選ばせていただきました。一方で、なかにはそんなに前向きではないような言葉もありますよね。

**野村：**僕が関わり始める前に、少し不安定な時期もあったようです。何をしてもうまくいかず、障害の進行によって杖を、さらに車椅子を使うようになったころ、自己肯定感を持たずにいたらしいのですね。そんなある日、筆を持たせて、ちょっと書いてみたらと言われて始めたのが書なんです。それが評価されていくことで自己肯定感を取り戻し、少し不安なときも、よし、書いて落ち着こう、ということがあったようです。辛いときを乗り越えるために取り組むひとつのツールでもあったのだと思うし、いろいろな気持ちで書に向き合っていたのではないのでしょうか。

—— 続いて、宮田さんと笹さんが選んだ関口さんの作品も読み上げさせていただきます。《カクテル》《今とりこみ中》《どぼくかんけい》《ときはすぎゆくままに》《ニャンニャン村》《かしこ》《けっぱくをあかせ》《みそっかす》《ある日のできごと》《とべ》《まったくもう》《もうやりきれない》《アウトロー》《おおぼけこぼけ》《とびきりじょうとう》《全はいそげ》《雨がしとしとっとうしい》《けりをつける》。

**笹：**宮田と私が選んだ作品には、例えば関口さんが筆を洗わずに使い続けていたと聞いて、その筆先の感じに注目したのがあります。また、周囲から聞こえてきた言葉もキャッチして書にすると聞いて、そのときの関口さんを思い浮かべてつい微笑んでしまうようなものも選んでいます。素敵な言葉が多く、ネガティブな言葉もどこかトボけた感じがありますよね。一方で、ちょっとカッコいい感じや、鬼気迫る感じ、かしくまった感じのものにドキッとします。そうしたものも選びました。

身近で小さなことから、すごく壮大なことまで、言葉のチョイスの振り幅も魅力だと思います。私がすごく好きなのが《ニャンニャン村》です。それが何なのか全くわからないけれど、愛しい気持ちになるし、行ってみたいなと思える。そして今回、関口さんの書をたくさん展示する、つまり見る側が受け取ることは、手紙のような側面もあるかなと思ったとき、締めくくり《かしこ》がくるのもいいかもしれないと思いました。

—— その《かしこ》に対応するように、工房集さんが《であい》を選んでくださっていましたね。そこで関口さんの展示は、《であい》で始まり《かしこ》で終われたらと考え、この2点は展示壁の背景色を変えています。

**笹：**三者それぞれで選んだものが、ほとんど重ならなかったのも面白いですね。見に来てくださる方々も、引かれるものはそれぞれ異なるのでしょうか。また、関口さんの書と、私たちの《微分帖》に共通するようになった部分もあります。《微分帖》では、自分で書いたことが普通だなと思っても、受け取る側には新鮮だったり、リアリティを持って相手の世界を感じられたりすることがあります。関口さんの書も、見る側がハッとさせられたり、お人柄を感じたりするものが多いですね。

**野村：**関口さんは展覧会などに際して、実演販売

というかたちで、お客さん側のリクエストした言葉を書くこともありました。ただ、頼んだところでオーダーしたものが上がってこない(笑)。お話ししながら、いつの間にかちょっと違う言葉を書いてくれたりして。だったらもう、関口さんが相手に感じたものをそのまま書いたらよいのでは、となったのですね。気分が乗ると「好きなものは何ですか」「お花が好きかな」といったやりとりから「はな」と書いたこともありました。

## 交差する日常の先にあるもの

—— 今日お越しになれなかった宮田篤さんから、メッセージがあるそうですね。

**笹：**はい、私のほうで代読させていただきます。「今日は貴重な機会をいただいたにもかかわらず、そちらに何えず申し訳ありません。おかげさまで同じ展示室の仲間として、あるいは言葉をモチーフのひとつにする作家同士として、ふたつの作品が共有する、ここにしかない場所を作ることができたのではないかなと思います。また、今回はコラボレーションの機会もいただきました。もしも関口さんに会場へお越しいただけたら、どんなお話をされただろうかと考えます。あるいは一緒に『びぶん書』をしたら、どんな言葉を書いてくれるのか、書いてくれないのかなど、『びぶんブックセンター』で店番をしていると、ふと考えることがあります。関口さんの書を鑑賞するにあたり、何の言葉を書いたか、どう半紙に墨で書いたかに加えて『びぶん鑑賞体験』を加えられたことは、我々ユニットとしてひとつの達成になりそうです。ご協力いただいた皆様にこの場を借りて改めてお礼申し上げます。」(当日読み上げられたメッセージから抜粋)

—— この展覧会は日常をテーマにしたものなので、関口さんの作品にある数々の言葉を拝見したとき、関

き間違えなどからも作品が生まれることに、私は強い関心を持ちました。そういうことってふだんもあるなと思ったのです。例えば、私はかなり大きくなるまで、換気扇のことをずっと「換扇機」(かんせんぎ)と言っていたんです。そのことも関口さんのエピソードとちょっと重なり、言葉で日常を感じられる作品の魅力を感じて、お声がけさせてもらいました。

一方で、宮田さんの《微分帖》は、人と人とのつながりで、ひとつのものをつくり上げる。これも、日常ってそういうものだなという気持ちがあってお声がけしました。そのうえで、両者とも言葉を使う作品同士ですし、同じ部屋で一緒に何かできるといいなと思ったのです。

**渡邊：**じつは最初にそのコラボレーションのお話を聞いたときはイメージがわからなくて。関口さんの作品はそれ自体で完結しているの、そこに他の作家さんがコラボレーションするというのは、どういうものになるのか心配だったのが正直なところ(苦笑)。でも実現してみると、こういう表現もあるのだという新たな発見をさせてもらえました。今までにないことで、とても新鮮で良かったと思います。

**笹：**そう言っていただけて、ほっとしています。先ほど、関口さんからお手紙を受け取るような気持ちもあったとお話しましたが、同時に、私たちがそのお手紙にお返事を書くような気持ちもありました。関口さんの言葉を受けとめ、そこに自分たちの言葉を、世界を、少し加えていくような感覚です。そして、もし関口さんがそこへさらに何か加えてくれたら……と想像することもあります。

—— 今日皆様、ありがとうございました。

## 土谷紘加 + 笠松彩葉 (アトリエコーナス) 「つくることの日常」にふれる

——今日は土谷紘加さんと、彼女の活動の場であるアトリエコーナスの笠松彩葉さんをお迎えしました。まずは自己紹介をお願いしますか。

**笠松:** 土谷紘加さんは2015年春に特別支援学校を卒業後、アトリエコーナスを利用なさっていて、もうすぐ10年になります。私は同じ2015年の秋にスタッフとして働き始めました。ですから紘加さんの後輩ですね。支援員としてメンバーの日常をサポートしつつ、アート担当としてメンバーの作品管理やアート活動のサポートをしています。

アトリエコーナスは特定非営利活動法人コーナスが運営する生活介護施設で、1993年に知的障害者のお母さんたちによって設立されました。大阪の阿倍野区、「あべのハルカス」がすぐ見える場所で、現在は紘加さんをはじめ14名が利用されています。年齢層は25～55歳で、地域の方が中心です。活動は平日10時から16時までで、午前中の約2時間はアート活動、他の時間は近隣の清

掃活動や、コーナスで作っているクッキーの袋詰め、ダンスや外出などの余暇活動をして過ごしています。

——私が伺った際は、アットホームな雰囲気が印象的でした。作家さんごとにお部屋が区切られているけれど、隣で話していることに別の部屋から返事が聞こえたり、歌声が聞こえてきたり、皆さんが仲良しな感じで素敵だと感じました。

**土谷:** はい。仲良しです。

**笠松:** そうですね。日常をいかに楽しくすごせるかに重きを置き、どこに行きたいか、何をしたいかも一緒に話します。メンバーが出展する展覧会にはできるだけ一緒に行くことも大切にしています。

### ビーズで始まるコミュニケーション

——土谷さんの作品「COLORNY(カラニー)」は、

5ミリ程の筒状のプラスチックビーズ(アイロンビーズ)を、凸のついたプレートに並べて模様をつくり、アイロンの熱で圧着させるものです。いまご本人が手にしているのは新作ですか？

**土谷:** 今日できた。これは黄色とオレンジとブルー。

——これはより小さな2.6ミリビーズを使った「micro colony(マイクロカラニー)」ですね。所々にちりばめた青いビーズは、何をイメージしているのでしょうか？

**土谷:** バニラ、みかん……。

**笠松:** 紘加さんはよく、自分の作品をフレイバーというか、味のイメージで教えてください。これは先週並べておいたビーズを使い、先ほどアイロンでつくっていました。ふだんは、完成するとその日の午後はそれを持ち歩き、アトリエ内の人たちに見せたりしながら過ごしています。

——作品がコミュニケーションツールなのですね。

**笠松:** 先ほどのような味や形の話を話し、そこから紘加さんの好きなことの話につながることもあります。例えばバニラなら、今日はアイスを食べにお出かけするのですよねとか。そうして作品を見ることが、会話のきっかけになるようです。色が多く混ざっている作品ほど、フレイバーも増えるようです。この作品だと……。

**土谷:** ストロベリー、チョコ、これはピンク。

**笠松:** 単色の作品では大抵その色に対応した味があり、色数を使ったものは上から順にフレイバーを教えてください、本人の目に止まった色のフレイバーの話になったり、さまざまですね。

——土谷さんは、どのフレイバーが一番好きですか？

**土谷:** バニラ。ここ。こっちょこっちょ。

**笠松:** たしかに、最もよく名前が出るのはバニラですよ。対応する色の幅も、クリーム色、水色、白など広く、やはり一番好きなのかなという気がします。

### 14平方センチメートルの宇宙

——笠松さんがアトリエで働き始めた2015年、土谷さんはもうアイロンビーズ作品をつくっていたのですか。

**笠松:** はい。私が働き出した時には今の制作スタイルでした。1人でビーズを並べ、アイロンも使っていたので、もう何年も制作されている方なのかな?と思ったぐらいです。その他、ダンスや散歩などの活動にもアクティブに参加していました。

——初期の作品から、ビーズのパーツを一部溶かしきらない表現や、アイロンの当て方でうねるような表現があり、すごいと思います。

**笠松:** アトリエコーナスにこられる方々には、まずはどんなことに興味があるのか、画材をいろいろ試し、保護者の方や学校の先生に話を聞くなどします。紘加さんはアイロンビーズが好きだと聞いてまず始めてみたのが、小さな四角や丸の作品でした。今回の出展作群の1/4ほどの小さなもので、やがて今の14×14センチほどのサイズになっていきました。また、ビーズとアイロンが熱でくっつくのを防ぐために間に挟むアイロンシートとして、クッキングシート、専用のプラシート、リサイクル可能なクッキングマットの3種を使っています。どれを選ぶかで表面の質感がマットな感じ、ツルツル、デコボコと、それぞれ異なる特徴もあると思います。

気持ちの面での変化で言うと、月曜から金曜まで毎日1枚作り続けるうちに、慣れてきてペースが上がり、午前10時から12時だった制作時間も増



え、2019年ごろは1日7枚もつくるようなことがありました。もちろん大好きで楽しく取り組んでいると思う反面、午後から別のプログラムがあるときなど「もっとやりたかったのに」という感じで紘加さんがイライラしてしまうことも起きました。加えて材料費予算などの事情もあり、2020年くらいに一度、制作のありかたを見直したのです。制作時間は当初のものに戻し、休憩もしっかり取り、午後に別のプログラムがある日は「今日はここまででピースは片付けますね」というふうにしてもらいました。

そこからピース以外の活動時間も増え、他にも楽しいことをしたいよねという話になりました。近年はコロナ禍でできなかったことも多いので、どう楽しく過ごすかを一緒に考えるなかで、人との関わりが増えたようにも思います。いまは主に夕方に「作品発表」をしていて、好きなスタッフに作品を見せる時間も増えたと感じます。もともと紘加さんは自分の作品がすごく好きで、持ち歩いて過ごすなどしていたのが、より積極的に人に見せることも増えたと思います。

**土谷:** 思います。はい。

**紘松:** ピースの購入も、紘加さんと一緒に行くことを始めました。2019年ごろまでは、ピースを箱にバンバンに詰めた状態で、毎日そこから好きな色を選び、とにかく作り続けていました。そのため当時はスタッフが全色をまんべんなく注文していましたが、今は紘加さんとネットショップの画面を見ながら、本人がほしい色を選んで注文しています。今回の新作は黄色とブルーとオレンジが入っていて、これも紘加さんが選んだものです。

——さわやかな色合いですね。季節なども関係するのでしょうか。

**紘松:** 秋に入ると渋い色や濃い色が増え、紫の割合が増えますし、夏はピンクなどの淡い色が増え

るようです。紘加さんのなかのブーム以外に、季節感などでも変わるのかなと思います。

## 日々の心象を写す、日記のような作品

—— 紘松さんは、土谷さんの作品を「日記のよう」ともおっしゃいました。この展覧会は「日常」がテーマなので、出展作品も土谷さんに選んでいただいた経緯があります。2500点を超える膨大な作品から、3日間かけてご自身に選んでいただいたことは、本当にありがたいことでした。

**紘松:** 紘加さんの作品は制作年代別に段ボール箱に保管しています。ひと箱ごとに30から100点ほどの作品が入っており、今回は各箱から1つずつ選んでもらいました。そうすると年代ごとになり、かつ選ぶときの彼女の気分も反映されて面白いのではと思ったのです。私はふだんから作品管理や出展準備などでメンバーの過去作品を見ることもあります。一方で、紘加さんはこれまで自作群をまとめて見ることはなかったもので、部屋一杯のピース作品を前に「わあっ」と言いながら選んでくれました。1枚1枚じっくり選び、かなり迷うこともありました。

選出作業は去年の冬で、紘加さんは着ていた紅色のダウンジャケットの生地の上に作品を当てたりしながら選んでいました。今回の出展作に赤みが多いのは、それを選ぶ基準にしていたのかなとも感じます。たとえば今日は白い服に水色とかレモン色が入っているので、もしいま選んだらそうした色が増えるのかもしれない。そう考えると、アトリエでも彼女に定期的に作品を選んでもらい、展示すると面白いかなと思いました。

—— 四角や丸のフォルムの作品のなかに、ハート型のものもありますね。

**紘松:** カラフルなもの可愛いものが本当に好きで、ヘアゴムもいつもキラキラの可愛いものを身につけ、よく見せてくれます。あるときまで四角い作品が中心でしたが、丸や六角形、小さいものだと靴や動物の形に切り抜いたようなものもあります。その後、これもあるよ!という感じでハート型が出てきて、それがグッと増えました。

—— 年代で並べたこともあり、多彩な表情の作品をご紹介できました。熱による凹凸の変化が見られる作品や、ピースを山のようにこんもりまとめて熱を加えた、2018年の作品群があります。

**紘松:** 通常はアイロンピースをプレートに等間隔で並べてつくりますが、2018年の作品群はピースを袋ごと、またはタッパーごととプレート上に山盛りに乗せ、アイロンシートの上からアイロンで押さえつけ、力業でつくったものだと思います。

—— 新作群も作っていただきましたね。これらは「1週間」を表しているそうで、やはりピンクのハートから始まり……

**土谷:** 月、火、水、木、金。

**紘松:** これも毎日何点かつくったものから、紘加さんに選んでいただきました。

## 幾重にも重なる「日常」にふれる

—— 今回さらに、土谷さんに「さわれる作品」もお願いし、5点出してくださいました。ここでは先ほどお話した、ピースを山盛りにした作品にも久々に取り組んでくださいました。これについては何か心理的な変化もあったのでしょうか。

**紘松:** やはり日々の気持ちの変化は作品にも関係すると思うので、紘加さんとしても、久しぶりに

やってみようかなとか、あるいはもうこの色は使い切っちゃおう!といったことはあったのかもしれませんが。気持ちのお話で言うと、一緒にいて、嬉しい、悲しい、怒っている、といった気持ちをはっきり感じ取れる部分もありますが、作品を前に「この日は楽しかったのかな、それとも怒っていたのかな」というように見てもらうことも面白いかもしれませんね。

**土谷:** 怒ってないよ(笑)。

**紘松:** 紘加さんの作品は色の種類を問わずさまざまですが、今回その中から選んでくださいとお願いすると、シンプルな1色や2色でつくったものや、形も綺麗なものを選ぶことが多かったと感じます。紫や緑、グレーもあり、展示室1に飾ってもらった様子を見ると本当にカラフルなのかわかりますが、側で見ていると、特に青や赤、ピンク、水色のようなビビッドな色はお好きなのではと思いました。

—— たしかに単色使いのものも多いですね。

**土谷:** (マイクロカラニーの作品を指して) こっちはバニラと紫とグレー。ごまプリン。

**紘松:** グレーはごまプリンですね。青がバニラで、これはアイスの「スーパーカップ」のラベルが青だからだと思います。

—— なるほど! なお土谷さんが選んでくれた年代別の作品群の隣には、2017年制作の作品群から一部を時系列で並べて展示しています。比べて見ていただくことで、土谷さんという作家について理解が深まるのではと考えています。

**紘松:** 一方は紘加さんが日々作り続けている様子が伝わるもの、もう一方はそのなかでも特にこれ、ということで選ばれたものなので、私も面白いと感じました。

—さわれる作品は展示室2にあります。ハート型のものや「micro colony」の作品、厚めのビーズを少し変形させたものなど、各作品の違いを直にふれて楽しんでいただけたらと思います。

笠松：私も今回の展覧会で、紘加さんの作品が彼女の日常と地続きというか、本当にすぐ隣にあるものだと改めて感じました。彼女の日常のなかに溶け込んでいるアート活動から、新たに生まれてくるものを楽しみにしています。また、今回「さわれる作品」という形でも発表したことに関連して、紘加さんにとっては、自作をさわることも日常のなかに確かにある営みではと思いました。来場者の皆さんが、紘加さんもこうして作品にふれているのかなと想像し、そこにある日常を感じてもらえたらと思います。

—ありがとうございます。皆さん、遊びにきてください！

土谷：ぜひ、遊びに来てください！



## ユ・ソラ

意識されない「糸」の大切さ、もろさを見つめる

—最初に自己紹介と、ふだんの制作の日々について教えてください。

ユ・ソラ（以降「ユ」）：布とミシンを使って、刺繍による平面作品や、彫刻ともインスタレーションとも言える立体作品を制作しています。子どもがいま1歳3か月で、昼は子育て、夜は制作という生活です。韓国出身で、日本には留学で引っ越してきました。当時は大学内のスタジオ、知人のアトリエなどを転々としながら制作していました。ただ、妊娠したとわかった時、当分は子どもと離れられないと思い、広さを第1に優先して今の家を探しました。部屋が3つあり、ひとつは皆の寝室、2つ目はパパ（夫）の部屋で、3つ目が私の制作のための部屋です。

当初、私の部屋はどんどん皆の荷物がたまってしまいカオスな状態でしたが、リビングのテーブルなどで刺繍だけは続けてきました。ほぼ2年経った最近やっと片づいて、ミシンを使ったり、床に材料を広げて作業したりするスペースができました。

この春から、住んでいる区で子どもの一時預かりをお願いできることになり、もう1秒でももったいないと思い、預かり施設の近くのカフェでずっと刺繍していました。外出先でつくるときは、机の上で刺繍枠を使うためのスタンドを持っています。

今は自宅にも制作のための部屋ができたので、リビングと寝室に子どもの様子を確認できるカメラをつけて、ちゃんと寝ているかな、もうすぐ起きるかな、と見ながら静かにやっています。今後どんどん制作しやすくなるかなと期待していますが、この1年ぐらいは、実感としては10年ぐらいに長く感じました（笑）。

## 「日常」の大切さに気づいた時期

ユ：私が日本に来たのは、自分が作品で扱う「日常」が、韓国ではうまくいかない感覚があったからでもあります。まず、日常という言葉自体に対する感覚が違います。日本は自然災害なども多いからか、

何気ない日常の大切さや、穏やかな日常へのとらえ方が韓国とは結構違うと感ずます。韓国で日常という「日常からの脱出」みたいな、つまり日常はストレスだらけだとか、毎日同じ日常ではつまらない、という感覚があるように思います。これは映画やドラマ、CMからも感じることで、日本のドラマは穏やかなものが多いのに比べ、韓国では「目を開けたら突然10年前に戻って人生をやり直す」というような、急展開するお話も多いですね。

そこには環境や経験の違いもあると思います。私が今のような作品をつくる大きなきっかけになったのは、3.11の震災でした。当時、私にとって日本での初展示となった、横浜での日韓合同卒業制作展で来日していました。その日はたまたま、東京都渋谷公園通りギャラリーの場所（当時はトーキョーワンダーサイト渋谷）で展示を観ていたのです。これまで想像したことがない大きな地震を、初めて体験しました。驚いて、揺れが止まるのを待っていると、やがて周りの建物の非常階段から人々が降りてきました。鉄の階段を降りてくる足音がすごく怖かったのを覚えています。

当時は日本語がわからず、でも「じしん」という言葉は韓国語でも発音が似ているため、それだけはわかりました。ただ、あの地震がどれだけ大変なことだったのか当時は詳しく理解できず、何年か経ってやっとわかりました。またそのころ、韓国でも大勢の人々が亡くなる事故があり、そうした出来事以外にも自分の周りの人が亡くなるようなことが続いたのです。急に激しい波がきたというか。

——その後の制作にも関わる出来事でしたか？

ユ：はい。震災でも事故でも、亡くなった方々やその家族にとっては、もう以前の日常には戻れないということに急に理解し、自分が生きている1分1秒がすごく大切なのだと感ずました。それ以前から自分の部屋を描く作品はつくっていて、作品の

見た目はあまり変わっていませんが、そこに込めるものは変化して、すごく切実に作品を作るようになりました。

## 「普通」をめぐる研究

ユ：そこから「普通」について自分なりに研究していくなかで、自分の部屋ばかり描いて、見る側がそれを日常の姿だと思えるだろうかと気づきました。普通の日常って何だろう、ということですね。日本に引っ越した時期とも重なっていたので、今まで生きてきた韓国と、日本の日常とをよく比べて見ていました。例えば賃貸住宅の検索アプリで部屋の間取りをたくさん見てみると、構造が違うから生活が違うのも当たり前だと思えてきました。

そうして、身の回りで経験した日常から両者の似ているところと違うところを比べ、どちらにも共感できる「普通」の姿はあるのかをずっと研究しました。そこから今のような立体作品が生まれています。その際、誰が見ても家の中の日常だと思えるようにしたくて、モチーフには特にお洒落ではない、シンプルな家具などを選びました。

——たしかに「私もこんな風に家電を積んでいるな、レシートをよくクシャクシャにしているな」と感ずました。

ユ：ただ、やはり日常の姿というのは国によっても違うと感ずます。例えば韓国ではキャッシュレス化が進んで、だいぶ前から紙のレシートは使わなくなりました。また、ドアのロックは指紋認証や暗証番号のタッチパネルが主流で、鍵を見たことのない子どもも多いと思います。そういう流れは、韓国は早いと感ずます。

他方、2017年に友だちを訪ねて初めてヨーロッパを訪ねたとき、電車で隣に座ったドイツ在住の韓国人のおじさんと鍵の話をして「生活するだけでこんなに鍵があるよ」と、7個ぐらいついてい

る鍵束を見せてくれて。ロンドンでも腰に鍵をたくさんつけた人が世代を問わず結構いました。ですから、もしまた違う国に住むことになったら、違う日常を描くのかもしれないと思います。

——お話を伺っていると、いろんな視点の日常を見たくになります。ひとことで日常と言っても、広がりがありそうですね。

ユ：そうですね。だからこそ、どこで暮らす人にとっても、私の作品から日常が伝わってくるものになりたいと、常に考えながら取り組んでいます。私のインスタグラムでレシートの作品を見たアメリカの人からダイレクトメールがくるなど、海外から作品について反応がくることはあります。そういうふうに、できるだけ共感してもらえる作品をつくりたいと思っています。

## 布と糸、かたちという

——今回、展示空間に吊るした大きな平面作品は、白い布に白い糸で描いていますね。一方、立体作品では、白い布で覆われた生活用品の輪郭が黒い糸で縁取られています。

ユ：最初に糸を使い始めたときは、ノートにボールペンで描いた小さなドロイングを拡大コピーし、ミシンで布に写すということをしていました。大学では繊維美術・ファッションデザイン専攻で、色々な素材を使って表現する課題に取り組むなかで出てきた発想です。パッと見ると白い紙かキャンバスに黒いボールペンで描いたように見えるけれど、よく見ると刺繍でできていると気づく。そうして、布に少し綿を入れ、自分の顔などを描いていました。入学後、学内のあちこちに彫刻科の作品が展示される催しを見て、立体作品も作ってみたい気持ちがあったのです。でも課題の提出期限が

迫り、ぬいぐるみのように立体の面を作っていく時間はなかった。そこで、ミシンでバーっと縫って、布に少し綿を入れ、描いた顔の鼻の部分などは綿を多めにして作ったのが始まりですね。

そうした作品を10年ぐらい作り、黒以外の糸も使ったり、布に絵の具で色を塗ったり、詰めものを綿以外の素材にしたりと、色々試しました。ただ、頭の中では作りたい立体が決まっていたものの、布と綿という発想からは限界があるとも感ずました。そこで、一旦その夢は置いて平面作品に取り組むなかで、白い糸を使ってみたときに気づきがありました。白い素材に白い糸で刺繍すると、何を描いているのかははっきり見えない。でも人って、それを見つけようとするのですね。だから見る人それぞれで、自分の知っているものだけが見えてくるのも面白くて。また、光によって印象が変わり、何も見えなくなったり、形が浮き上がってきたりするのは、白い糸の作品の面白いところだと思います。

結局、大学では複数専攻の制度を利用して彫刻科にも入り、布で立体を作ることに取り組みました。卒業後、6、7年は韓日を往復しながら作品を発表しました。その時期、日本での展示で「ボールペンのような小さいモノを立体で作ったら面白いのでは」と言ってくれた人がいて。小さなモノに綿が入るとぬいぐるみのようになってしまうから、綿なしでやってみたら、すごくいいな、これが私の作りたかったものかなと思えました。白と黒の組み合わせは平面作品と同じく、より多くの人から自分の日常の姿を重ねられる作品にしたいからです。ただ、色なしでも「現代女性の日常」と評してくれた方もいて、色だけじゃないとも気づかされました。

今のような立体をつくるようになって、作品にほつれたような糸が残り、絡まるのも面白いと考えるようになりました。鉛筆でデッサンをすると、最終的には消す線がいっぱいありますよね。ミシンで作ると自然に糸が残るので、一部をそのままにしたり、場合によっては何を描いているかわからな

いほど残したりもします。立体作品のほうは、家具や細々した日常品を全て形からつくって、そこに布を張り、最後に糸を貼るのですが、平面作品よりも糸を残しています。見る人によってはそれが未完成に見えたり、不安定に見えたり、色々な意見があります。

こうした作品の間を歩いてもらい、「あ、これ知ってる」「この本、持ってる」と面白いところを見つけながら、日常を見直すことができたらという思いでつくっています。時間を切り取って誰かの部屋を再現したような作品ですが、近づいた時に糸が揺れると、そこに空気や時間が流れていることも感じられる。時計の作品だけは実際に針が動くようにしているのも、そういう気持ちからです。そして、洋服から飛び出した糸を引っ張るとどンドンほつれてしまうように、もし作品の黒い糸を引っ張る、踏むなど、間違えてちょっとした力が加わると、その輪郭はすべて消えて真っ白になるかもしれない。それは、日常のもろさや、もろいからこそ大切さなど、私が表現したかったことにつながっていると思います。

### さわれる作品

——今回初めて、さわれる作品も作っていただきました。

ユ：竹野さんとアイデアを出し合い、実際に押せる電気スイッチや、開けられる引き出し、箱入りティッシュペーパーなどをつくりました。従来は家具なども軽くて薄い素材で作っていました。私にとって、1人で作って1人で運べることは大事な点で、それは自分が日本という海外に来ているからというもあります。でも今回、さわれる作品には本物を使いました。改めて感じたのは、本物って重いのだなということ。重くて、ぶつかるとすごく痛いなと思いながらつくりました。

日常を通じて身についた感覚、たとえばスイッ

チを押すとそこでカチャッとなるのはごく当たり前だからこそ、ちゃんと再現したいと思い、壁に穴を開けて本物を設置しています。本当はどこかの電気が点くようなことまでやりたかったですね。でも一緒に展示している飯川雄大さんの作品のようないしけもあるから、「どこかで何かが点いているのかな」と思われているかもしれません。

——そうして鑑賞者に想像してもらえることも、この展覧会のテーマのひとつです。

ユ：私の作品を見たとき、その質感が気になる方もいると思いますが、日常生活にあるモノをモチーフにした作品に対して、日常と同じ使い方・触り方をしたら面白いかと考えました。ただ、私のそうした意図とは別に、皆さんティッシュ箱のティッシュペーパーを優しく撫でてくださったり、箱を持ち上げて中のティッシュがポロっと出てしまったりしたのも印象的です。もしまたこういう機会があったら、今回の経験も参考に、より面白いのを作りたいです。

今日は、泣いてしまいそうな話も少ししましたが、私が目指しているのは面白さです。「面白い」から「もっと見たい」となり、そこから自分の日常を振り返ることにつながるのかな、と展示を重ねるなかで感じています。展覧会場で初めて出会った人と、洗濯バサミや、靴下の畳み方について話し込んだこともあります。そこから家族で、カップルで、お互いの話を共有したり、ふだん気にしていなかったことを気にし始めたりする、小さなきっかけにつながるよいなと思っています。



### 原田 郁

「わたしの空間」をひらく窓

——本日のゲストは原田郁さんです。さっそく自己紹介からお願いできますか。

原田：コンピューターの中にバーチャル世界を作り、その世界のなかの風景を絵画として描く、という作品を発表しています。2008年末から始めて、もう15年ほどになります。このバーチャル世界のことには《inner space》と呼んでいて、それを温め、拡張しながらつくり続けています。

——こうした表現に進んだきっかけはあるのですか？

原田：美術大学で絵画を学んでいた20代半ばに、自分の絵の主題は何かという壁に突き当たったのです。「私が描き続けたいものって何？」となったとき、生まれ育った山形県で、盆地に広がる田んぼの先に山並みが見える景色を思い出しました。それが私の原風景だったのです。進学して住み始めた東京は刺激的なものが乱立する世界で、興味

も引かれたし目移りしたものの、どれもじっくりこないと感じていて。そこで私の生まれた場所に着目してみようと思いました。

子どものころは小学校の裏山から見下ろす風景や、山の上にある神社などをひたすら写生するのが好きでした。あの感覚を取り戻せたらと思ったとき、そうした風景を自分でつくってしまおうかという発想になったのです。当時、友だちが『どうぶつ森』というゲームをもっていて、それはあそぶ環境を自ら構築していくようなものでした。これだと思って、そうしたゲームの世界にヒントをもらい、描きたい場所をバーチャルで作ってみようと考えました。

そこから「SketchUp」というオープンソースの3次元モデリング・ソフトをさわり始め、現在に至ります。まずは盆地のような場所をつくり、そこにぼんやり見えてくる子どものころの風景や、積木のモニュメントをつくってみたのです。そうして地表を広げていくと、保存も拡張もできて、アーカイブ

にもなるし、面白い!と思いました。前例もなかったため、とりあえず10年やろうと決めました。そうして時の厚みをつくり、たしかな場所になっていったらいいなと思ったのです。

——つまり、コンピューター上に自分の世界をつくり、それをキャンバスに描くところまで、同時に発想したのですね。

**原田:**そこは最初からセットで考えていました。「作品として成立するのだろうか」と思いつつ、「でも続けてみたい」という気持ちはすごくあったのです。以来、絵画も描きながらなのでゆっくりとですが、《inner space》は広がってきました。積木を使うのは、私自身が子どものころ遊んでいたこと、見立て遊びに最適なこと、そして木の温もりがあるように思うからです。実際に天然木の積木を買い込んで、着色して組んでみることもしました。そうすると箱庭のような感じで、やはりつくる楽しさがあり、どこか癒されもしました。

### 日常の積み重ねが育てるもの

——ちなみに、ふだんの原田さんの暮らしはどんなものなのでしょう。

**原田:**いまは作家業に加え、母親業が9年目です。制作以外では、1日のタイムスケジュールと献立のことをよく考えています。明確な切り替えはなく、結構シームレスで、無意識に細かくスイッチを入れ替えているのかと思います。たとえばパソコンをひらいて《inner space》を立ち上げると、その世界にアクセスして「さあ描くか」となる感じでしょうか。

——新作をつくるときは、《inner space》にも新しい要素を加えるのでしょうか。

**原田:**直にパーっとモデリングする感じではなく、紙に描くことも、パソコン上の別の環境でつくっておくこともあります。頭の片隅にある「気になる形」からモニュメントやオブジェをつくり、それが5年、10年越しで自分の感情や感覚と合致したとき「いける」とGOサインが出ることもあります。そこは慌しい日常のなかでも、感覚を研ぎ澄ませている部分です。

ですから無理にはつくらず、つくれないときは、ただ仮想世界を散歩するような感じで眺めるなどして、気づいたことは手帳やパソコンに書き込んだりもします。関連して生活のなかでも、例えばハプニングがあったときに「この感情は何色だな」とか、人と話していて「この人はこういうカラーも持っているのだな」とか、自分の感覚的な記憶の仕方があって、それが制作時に突然やってくることもあります。

——原田さんの作品は色合いがビビッドで元気をもらえると同時に、とても静かな感覚があり、見ていると落ち着きます。

**原田:**先ほどお話した山形の風景は、冬になると真っ白な世界になります。私にはそれが白いキャンバスのように見えて、色を置いてあげたい気持ちはありました。また、これはうまく話しますが難しいのですが、父も絵を描いていて、ただし色弱なので色の扱いは得意ではないのですね。それでも学生時代から白黒の絵をずっと描いていたのです。私が物心ついたときには家じゅうに父の絵があり、私は絵で白黒のものだと思って育ったのですね。

それで自分も描こうとなったとき、最初は穏やかでふわふわした絵を描いていました。でも、これも20代半ばに突然、明解でメリハリのある色調で描き始めました。稲妻に打たれたように、自分がそれを欲している瞬間があったのだと思います。そして、色の力を信じたいという思いがあります。い

まの作品も、絵画のほうは面で色を塗り込むような仕事で、たしかに絵の具の力はすごいんですね。塗り込むほどに驚くくらい主張してくる。まるで色が「見て!」と訴えてくる感じで、私も「いや〜すごいね……」みたいな感じです(笑)。

——絵画作品の方は、やはり絵の具のテクスチャーなども豊かに感じられます。

**原田:**絵画らしさとしての質感や重さを与えたくて、光を拾うことや物質感など、モニター上にはないものを意識して描いています。じつは大学1年生のころはコンセプチュアルアートがやりたくなり、記号的なものや、「形」から感じる意味性など、ミニマルな対象に興味がありました。そこで学んできたことも、いまの表現に反映されていると思います。以前は、自分は複雑だな、どうしてストレートにできないのだろうか悩みもしました。でもいまは、割り切れなくてもいいし、それが面白みだと思っています。

### 私的な世界がひらかれていくとき

——今後も作品は変化していきそうでしょうか。

**原田:**これまでかなり変化したというか、変化させてもらったというか。自分の内面に向き合うところからつくり始めたのですが、美術の世界だけでなく、ゲームが好きな人や、建築関係の方など、意外なところから見てくださる方も増えました。そうした方々がコミッションワークのお話をくださることや、私の仮想世界をアバターで動き回れる作品をつくってくれるということもありました。

そのたびに、自分のつくった世界に改めて新鮮な気持ちで向き合えるところがありました。そうして「私のインナースペース」が、気づいたら外にひらかれていたのは大きな変化だと思います。皆さんのアイデアも入り込んでくるのは興味深く、もう

私だけの世界ではなくなってきたのかもしれませんが、それをNGとすべきか悩んだ時期もありましたが、日常でも多くの物事はひとりでは成立しないのだから、これも自然なことだと流れに身を任せることにしました。そうすると可能性がまた広がり、新たにインスタレーションなどのアイデアも浮かぶようになりました。

時代の変化もあるのかもしれませんが、気づけば仮想世界がより身近な時代になり、「原田さんのやっていること、わかるよ」という理解者も増えたのは不思議ですね。そのうちVRグラスで《inner space》を散歩することなども、技術開発の側から声をかけてもらえたらチャレンジしてみようかなという感じです。基本的には、やはり絵を描きたい思いを中心に、《inner space》を広げていくのが目標です。

——そうした意味では、展覧会で各所を訪れる機会なども、制作に影響しますか?

**原田:**展覧会のテーマなどに沿って、《inner space》を拡張することもあります。知らない場所を訪れるのは遠足のようなワクワク感があり、インターネットで前調べをしたりします。例えばソウルで個展をした際は、そうした断片的な情報も使って、私のなかの「ネオソウル」のような空間をつくり、それをモチーフに描いてみました。

今回は「日常アップデート」展のコンセプトを伺って、自分の原点回帰だなと思いました。展示室の最初にある窓の絵画シリーズ「WINDOW」は、積木がいろいろ組んであるところに、よく見ると私のスタジオもあって、イーゼルやキャンバス、絵の具や木枠を組む前の材料があり、完成した絵もあります。描き疲れたら外に出て、レジャーシートを広げたとこにティーポットとドーナツが置いてあり……というふうに、この展示のためにちゃんと絵を描いていますよという感じです(笑)。

「誰かの居場所」としてのアート

——今回はワークショップ「共感の窓際」も開催していただきましたね。

**原田:** 皆さんからも窓の絵を募集し、応募作品を《inner space》内のギャラリー空間に飾る試みです。ギャラリーは、インクルーシブをテーマにして円形の空間にしました。いま、約200名の参加者の方々の作品が、映像作品《inner space》のなかのギャラリーでご覧いただけるかたちになっています (p.54 参照)。

——「日常」においては誰もが何かしら悩んでしまうこともよくあるはずで、そうしたとき自分の居場所のようなものをつくれたら、なんとか前向きに進めるのではと考えていました。そこに原田さんの《inner space》が私のなかで合致して、ぜひ参加していただきたいと思ったのですね。

**原田:** それはすごく嬉しいです。

——今回の原田さんの絵画を展示したスペースに入ると、本当に落ち着きます。「みんなの仮想世界」になっているのではないかと思います。

**原田:** これらの作品は《inner space》へつながら「どこでも窓」みたいな存在だと思っています。絵を飾ることで、その壁に仮想世界の入口がいくつも生まれ、さまざまな場所からアクセスできたらと考えました。ちょっと疲れたときに、私だったらこの世界で何をするかと想像したり、一瞬でもリアルな空間から離れてリラックスしたり……。そうして時間をかけて眺めて、ゆっくり自分自身に帰っていくような時間をすごしてもらえたらと思っています。

——色にパワーをもらってまた日常に戻る、というよ

うな過ごし方もありそうです。

**原田:** 色って、同じ人でもその時々で、黄色が気になったり、ピンクに反応したりと、見え方も変わりますよね。私の作品では色はモデリング時に決めるのですが、たまにモノトーンで描くときもありますし、逆に変な色同士をぶつけたりもします。この色とあの色は調和しないというセオリーから外れてもオッケーで、あえて楽しむというか。どこかで、何が隣り合っても調和は絶対にはずだと思っているのです。

——ちなみに、仮装空間の中に人がいないのは、何か理由がありますか。

**原田:** 私のなかの世界だから、というのが1番の理由です。当初は私のアバターみたいな子を入れていましたが、いま描いている「私」がこの世界とやりとりしながら描いているのだから、アバターはいらないと思ったのですね。積木で動物や乗り物のかたちをつくったものはありますが、それは純粋に子ども心に帰って「この背中に乗りたいな」というようなものをつくっています。

そして《inner space》のなかの存在の多くは、私の日記のようなものでもあります。言葉で書く日記とは違いますが、いろいろな形や色を、自分なりに消化したいのでしょうね。人にはあまりはっきり言いたくない思い出なども含めて、形になって出てきているというか。だから「これ、なんですか?」と聞かれたら表立っての説明をしつつも、本当はこうなんですということもあります。

——そうした意味では、《inner space》は原田さんにとって、もうひとつの言語のようなものでもあるのでしょうか。今日はとても興味深いお話をたくさん聞きました。ありがとうございました。



飯川雄大

「ふつう」の感覚を想像力で拡張する

ゲスト:成田 久 (資生堂アートディレクター、アーティスト)

——本日の「日常ラジオ」は公開収録です。飯川雄大さんと、特別ゲストに資生堂のアートディレクターであり、アーティストでもある成田久さんをお迎えしました。おふたりはどのように知り合ったのでしょうか?

**成田:** 美術館で働く、共通の友だちに引き合わせてもらったのがきっかけですね。

**飯川:** 僕も久さんの作品や活動のお話は聞いていました。それで僕が東京に来たとき、ぜひお互い会ってみて!という感じで。

**成田:** その会食が盛り上がり、飯川さんの作品にも興味があったので、先日この東京都渋谷公園通りギャラリーに親に来たんです。来場者が重いバッグの作品を別の展覧会に運ぶ《デコレータークラブー新しい観客》(p.64 参照) もやってみました。観客が作品を会場外に移動させるという行為が、すごく面白いと思ったんです。まず必要な手続きとして作品の「借用書」を書きました。えっ?と思ったのが「エスカレーターは使わないでください」と

書いてあって(笑)。渋谷の半蔵門線ホームで、見た目よりずっと重いキャリーバッグを抱えて、階段を登り降りしてきました。

**飯川:** 僕はその日はCAPSULEで店番をしていたら(編注:「飯川雄大“デコレータークラブ:ニューディスプレイ”展)、すごく派手で、仕上がってる感じの人が現れて……。

**成田:** ランニング姿で(笑)。そのときは運べるバッグが数点あって、持ちやすさとかより、自分の服とコーディネートしたくて赤いバッグを選びました。一緒に行った友だちに写真も撮ってもらったりして、そういうのも楽しいですよ。

僕は海外含め出張などに、いつもクマのキャリーバッグと出かけるんです。今回、飯川さんのバッグの作品を持った姿をSNSにアップしたら、いろんな友だちが「クマちゃん?」と言うから、クマはいま家にいて、これは現代アートの作品なのと教えた。「すごい、面白い!」と言っていました。ふつう、作品ってさわっちゃいけないじゃない。「ふつう」って

何?ということもあるけれど。だからあの行為をもっといろんな人がやれたらいいと思いました。

## 作品の中に自分が入っていく楽しさ

飯川：作品をつくる時「たくさんの人に見てもらいたい」とも思うのですが、この作品はそこを一旦諦めたうえでやっています。バッグを運べるのは1人ずつでも、長いこと続けたら少しずつ増えるだろうし、体験としては強く残ると思うんですね。

成田：僕が体験したのは、都知事選も重なった七夕の日曜で、そんな日にあのバッグを持って自分も楽しめたらと思いました。自分はメディアの仕事もしているから、SNSにアップしてたくさんの人が面白ってくれるのも、あの作品のあり方としていいなと思ったんです。自分が作品のなかに入っちゃおう、みたいな気分で。

飯川：駅や街なかで、すごく軽やかにバッグを運んでいる久さんの写真をSNSで見せてもらいました。あの暑いなか、ありがとうございます。いま鳥取と高松で僕が参加している展覧会場とのあいだでも、それぞれ運べるようにしています。8月からは神宮前のLAG (LIVE ART GALLERY) での個展会場も加わり、鑑賞者の手でバッグを行ったり来たりさせたいなと思っています（編注：鳥取県立博物館「アートって、なに？」展は2024年8月25日まで、高松市立美術館ランチギャラリー「デコレータークラブ—ショップ」展は7月21日まで、LAG「デコレータークラブ：長い仕事 飯川雄大」は8月9日から31日まで開催）。

成田：共通の知人が、渋谷から鳥取にもっていきに挑戦するかもと言っていました。なんか彼女たちがやると『キャッツ・アイ』みたいじゃない？あ、でもそれだと泥棒か（笑）。

飯川：作品を運ぶ移動手段や道筋も含めて、いまいる場所から別の場所のことを考える。それが起きるだけでも僕としては嬉しいです。もっと言えば、

運ばない人も「高松でも何かやってるんだ」「鳥取でも？」と想像してくれたら嬉しいですね。

成田：知らない場所とかに行つて、ハプニングがあるほうがより面白そう。やっぱり作品だから、秘密の金塊を運ぶような「何かあったらどうしよう」感があるよね。でも、周りは誰もそういう作品だと思っていない。それも何か夢があつて面白いと思う。あのバッグはいま何個あるのですか？

飯川：20個くらいです。移動の過程でいったん家に持ち帰ってもよいので、いくつかは誰かの家にあるかもしれません。バッグの紛失や破損は運んでくれる人の責任になりますが、罰則があるわけでもなくて。そもそも、ふつう展覧会中に作品を外に持ち出して、別のアートのスペースに運んでいくことはやらないですよ。

もともと僕の作品に《ペリーヘビーバッグ》という、見た目から想像できないくらい重いカバンを、展覧会場などにただ置いておく作品があつて、それを発展させられたらと思ったのが今回の作品です。どちらも、誰も目に止めないようなありふれたスポーツバックで統一していて、「日常アップデート」展にびったりだとも感じています。

ある人は、カバンが重いからバスに乗るのに時間がかかって、真剣にやっているけど、見た目は軽そうだから何かふざけていると思われたようで、運転手さんにむちゃくちゃ怒られたそうなんです。成田：（笑）。でも、それこそ日常に溶け込むものだからこそ面白いなと思いました。

## バッグと共に運ばれていくもの

飯川：久さんはメディアの仕事をされていますが、僕も大学はデザイン科で、広告やデザインにもずっと興味があつたんです。関連して、お客さんが移動することで情報も一緒に移動する、という考え方があつたそうですね。人は移動の過程でも他者と話したりするから、その考えや体験も移動していく

という話です。

成田：飯川さんのあの作品に関連して言えば、自分はいい意味でずるいから、やっぱりそれを自分の表現にしちゃうかな。あの作品も単に体験型作品というより、もう1歩踏み込んで考えると、そういう人が増えていくといいんじゃない？だからこそ、作品自体はさらっとしている方が面白い。

飯川：この試みは今回が3回目で、1回目は大阪の国立国際美術館と兵庫県立美術館のあいだを、2回目は箱根の彫刻の森美術館と熱海のホテルを使った「PROJECT ATAMI」のあいだを、それぞれ数十人の方々が運んでくれました。将来的には、海外の展覧会ともつなげてみたいと思つていて。

成田：たしかに、いろんな国でやったら面白いかも。自分のジェット機とかで運べる人がいたりして。

飯川：そこで想像することが、さらに広がるのではと思つています。ただ、以前に《ペリーヘビーバッグ》を美術館で展示したとき「海外のお客さんが小さい声でスタッフに『あれ、危ないから気をつけた方がいいよ』と伝えてきた」とも聞きました。極端な話、爆弾かもしれないとか、そういうことですよね。

成田：そこはもう国の違いとか含め、いろんな意識がありますよね。

飯川：もともと僕は子どものとき、友だちのカバンにこっそり重いモノを入れるいたずらをよくしていたんです。その後、大学生のときに電車で「不審物を見かけたらスタッフにお知らせください」というポスターを見たとき、両者にある何かを作品として組み合わせられるかな、と思つたのもきっかけでした。

成田：カバンひとつからも、いろいろと意識の違いがありますね。飯川さんの側もあれを運んでもらうには、相当考えなきゃいけないでしょう？例えば飛行機に乗るときとかも、法律的なこととか。途中でバッグが帰ってこなくなるかもしれない。僕は初めてシンガポールに行ったとき、カバンの

中をぜんぶ開けるよう言われて、空港でフリマ状態になったことがあります。でもそういうことも含めて、海外でどう実現するかは興味深い。

飯川：運んでくれる人が強制送還させられたらどうしようとかも考えます。それも笑つて楽しんでくれるくらいの人ならいいけど……。

成田：でもこの作品は、そうした社会性もあるのがいいんじゃない？海外はワイルドな人もいっぱいいるから、意外に軽々と運べる人もいるかもしれない。

## いたずら心から世界の見方が広がる

成田：他にも飯川さんの作品には、どこにつながっているかわからないロープを引っ張るとか、壁を押してみたら動くとか、巨大な猫ちゃんが何かの陰から顔を出しているとか、ユニークなものが多いですよ。見る側が驚かされるというか、第三者の関係性が入りながら成立するのが面白いなつて。飯川：子どものときのいたずらは友だちや家族だけに向けてやるけど、展覧会では会場側の担当者や、一緒に作品をつくってくれる人に交渉して、面白いかどうかや、安全性なども知ってもらう作業があります。実現して不特定多数の人が見るときには、構図的に一緒なのですが、そこまでの準備がすごく大変です。

——今回の展覧会では、壁のハンドルを回してもらう作品《デコレータークラブ—0人もしくは1人以上の観客に向けて》も、時間をかけて準備しましたね。渋谷区でこの建物を管理する部署と、土木関連や広告宣伝の部署にも確認をとりました。

成田：あの作品は、ハンドルを回すとどうなるのか、わからないままで終わっても、それはそれで面白いと思う。

飯川：会場のスタッフの人たちにも、来場者に詳

しい説明はしないでほしいと願っています。何が起きたのかわからないまま帰って、次の展覧会で知るとか、図録やインターネットで知って本人のなかでつながるなら、それが数年後でもいいという気持ちはあります。帰り道に気づく人もいて、逆に自分でハンドルを回す前に何が起きているのかを見てしまう人もいます。

**成田**：でも体験としては深いんじゃないかなと思った。ただ見るだけでなく、さわったり動かしたりする行為が入るのも含めて。だから僕は飯川作品で「日常アップデート」しましたよ(笑)。

### 「でっかい」関係性へのチャレンジ

**成田**：巨大な作品も多いけれど、あれは展示がないときはどうしているのですか？

**飯川**：ほとんどは全て現場で作って、現場で解体しちゃうんです。例えば《ピンクの猫の小林さん》という、ここ何年かいろんな場所でやらせてもらっているプロジェクトも、毎回、特定の建築や景色に合わせたサイズでつくっているんで、その時その場所だけのものなんですね。1匹だけ、2017年に広島でつくったものは、展覧会が終わった後も、石川県の珠洲のカフェで預かってもらっています。この作品は出会い頭で急に現れるのが重要なので、恒久設置のお話などもいただくのですが、そうすると最初の役割とちょっと変わってくると思っています。

**成田**：飯川さんは、そういうふうに「つくること」に対してのアイデアが常にあるって、どんどんそれを手がけている感じがします。その表現の幅が面白いし、視覚的にも、関係性という意味でも「でっかい」なあと思いました。あとの猫は、大きいんだけど、隠れているのもいいと思った。

**飯川**：嬉しいです。住宅地の隙間とかに潜んでいるから、余計に大きく見えるし、猫っぼいというか。2020年の横浜での《ピンクの猫の小林さん》は、

並木クリニックという病院の敷地を一部お借りして実現しました。このときは展示場所が会期直前まで決まらず、新聞の折り込みチラシで募集したら「うちでやれますよ」と言ってもらえて。この作品は、猫の一部が環境に隠れていないといけないなど、意外にコンセプト上の制約もあって、どこでもいいわけではないんですね。公立公園などにも置けたら面白いけど、自由に使わせてもらえる場所はなかなかなくて。だからギャラリーや美術館での展示は恵まれてたんや、その外で何かやるってこんなに大変なんや、と知った経験でした。

**成田**：エアバルーン製の《小林さん》もありましたよね。雪が降った後の様子もすごく素敵でした。

**飯川**：箱根彫刻の森美術館での展示ですね。ちなみに同じようなバルーンを使って、2023年に仙台で高さ26mの《ピンクの猫の小林さん》をつくろうとしたのですが、最終的にいろいろな理由から断念しました。でも、その過程を今年出た作品集の後編にまとめました。ふつうはあまり外部には出さない内容かもしれませんが。

**成田**：それもプレゼンテーションというか、作品の一部だから。

**飯川**：はい。一応まだ諦めてはいなくて、将来どこかで実現するための手がかりになる本を作ろうとなりました。『デコレータークラブ』という本で、この15年くらいの活動もまとまっているので、ぜひよろしく願います。

——お二人とも、今日は楽しいお話をありがとうございました。

**成田**：あつという間でしたね！楽しかったです。

**飯川**：ありがとうございました！



## 作家プロフィール Artists' Profile 작가 소개

### 飯川雄大 (いしかわ たけひろ)

言葉や映像、遊具のような装置を使い、鑑賞者が作品に触ったり、動かしたりすることで思いがけない場所で新たな体験を作るインスタレーション「デコレータークラブ」(2007-)を展開している。主な展覧会に、「飯川雄大展『デコレータークラブ：未来のための定規と縄』」(霧島アートの森、鹿児島、2023年)、「デコレータークラブ 同時に起きる、もしくは遅れて気づく」(彫刻の森美術館、神奈川、2022年)など。

#### IIKAWA Takehiro

Since 2007, Iikawa has produced works as part of his “Decorator Crab” series, in which he uses words, images, and playground equipment that viewers can touch and move, thereby creating new experiences in unexpected places. Major exhibitions include “Decorator Crab: Measuring the Future, Pulling Time” (Kirishima Open-Air Museum, Kagoshima, 2023), “Decorator Crab: Occurring Simultaneously or Awareness Being Delayed” (The Hakone Open-Air Museum, Kanagawa, 2022).

#### 이이카와 다케히로

말과 영상, 놀이 도구와 같은 장치를 사용 관객이 작품을 만지거나 움직이도록 하여 뜻밖의 장소에서 새로운 경험을 만들어내는 설치 작업 '데코레이터 클럽'(2007-)을 전개하고 있다. 주요 전시로「이이카와 다케히로전『데코레이터 클럽: 미래를 위한 자와 줄>(기리시마 예술의 숲[가고시마], 2023),『테코레이터 클럽 동시에 일어나는, 혹은 뒤늦게 깨닫는』(조각의 숲 미술관[가나가와], 2022) 등이 있다.

### 関口忠司 (せきぐち ただし)

入所施設の職員との会話の中でひらめいた言葉、テレビで耳にした言葉、普段の生活の中でパッと耳に残った言葉など、自身の中から湧き上がる言葉を日々書き連ねていく。温かみのあるやわらかな字には関口の人柄が表れている。主な展覧会に『『いま、気になる』あの人の表現』(嬉々!!CREATIVE GALLERY&CAFÉ、神奈川、2023年)、「まにあうかも／まちがうかも～さすらう言葉～」(Goozen—art and event space—、神奈川、2022年)など。

#### SEKIGUCHI Tadashi

Sekiguchi writes down words that come to him each day, such as words that arise in conversations with social workers, words he hears on TV, or words that happen to stick with him in the course of daily life. Sekiguchi's personality comes through in the warmth and softness of his writing. He has participated in exhibitions at Kiki!! CREATIVE GALLERY & CAFÉ in Kanagawa in 2023, Goozen Art and Event Space in Kanagawa in 2022.

#### 세키구치 다다시

직원과의 대화에서 번뜩였던 말, TV에서 들은 말, 일상 생활에서 문득 떠오른 말 등, 작가의 마음속 떠오르는 말들을 매일매일 써 내려간다. 따뜻하고 부드러운 글씨에는 작가 세키구치의 사람됨이 드러난다. 주요 전시로「지금, 궁금한 그 사람의 표현 전」(희희낙락! CREATIVE GALLERY&CAFÉ [가나가와], 2023),「늦지 않았을지도 / 틀렸을지도 -방랑하는 말들-」(Goozen-art and event space- [가나가와], 2022) 등이 있다.

### 土谷紘加 (つちたに ひろか)

2015年よりアイロンビーズを使って制作を開始。毎日3枚ほどの作品を完成させ、総数は2500枚を超える。ビーズの配置・色の選択・熱の当て具合は全て異なり、土谷の感覚によって構成される。シリーズ名のCOLORNY(カラニー)はcolor(色彩)とcolony(群体)を合わせた造語。主な展覧会に「3331 ART FAIR 2021」(3331 Arts Chiyoda、東京、2021年)、「HOME PARTY 06 —蝶や花や—」(みずのき美術館、京都、2020年)など。

#### TSUCHITANI Hiroka

Tsuchitani began working with perler beads in 2015. Each day, she completes around three artworks, now totaling more than 2,500 pieces. Tsuchitani decides the bead placement, color choices, and application of heat for each piece based on her senses. The name of the series, “COLORNY” is a portmanteau of “color” and “colony.” Major exhibitions include “3331 ART FAIR 2021” (3331 Arts Chiyoda, Tokyo), “HOME PARTY 06—Butterflies and Flowers” (Mizunoki Museum of Art, Kyoto, 2020).

#### 츠치타니 히로카

2015년부터 펠러비즈를 사용하여 창작을 시작했다. 매일 3장 정도의 작품을 완성하여 2500장이 넘는 작품을 제작했다. 비즈의 배치, 색의 선택, 열을 가한 정도가 모두 다르며 츠치타니의 감각에 의해 구성되었다. 시리즈명인 COLORNY(컬러니)는 color(색채)와 colony(군체)를 합쳐 만든 조어다. 주요 전시로는「3331 ART FAIR 2021」(3331 Arts Chiyoda[도쿄], 2021), 「HOME PARTY 06 -나비로구나 꽃이로구나」(미즈노키 미술관[교토], 2020) 등이 있다.

### 原田 郁 (はらだ いく)

2008年頃よりコンピュータ内に仮想の理想郷を立ち上げ、その世界で目にする擬似体験の風景を主に絵画として描いている。現実と仮想世界の融合が観客を新たな体験へと誘う。主な展覧会に「MOTアニュアル2023:シナジー、創造と生成のあいだ」(東京都現代美術館、2023年)、「多層世界の中のもうひとつのミュージアム」(ICC、東京、2021年)、公開制作「もうひとつの世界 10年目の地図」(府中市美術館、東京、2019年)など。

#### HARADA Iku

Since around 2008, Harada has built a virtual utopia on her computer, and paints scenery from the simulated experience she sees in this world. Her fusion of reality and the virtual world invites the audience into new experiences. Major exhibitions include “MOT Annual 2023: Synergies, or Between Creation and Generation” (Museum of Contemporary Art Tokyo, 2023), “The Museum in the Multi-layered World” (ICC, Tokyo, 2021), and the public production of “Another World Map of 10th Year” (Fuchu Art Museum, Tokyo, 2019).

#### 하라다 이쿠

2008년경부터 컴퓨터 안에 가상의 이상향을 만들고, 그 세계에서 보는 유사 체험의 풍경을 주로 회화로 그려내고 있다. 현실과 가상세계의 융합이 관객을 새로운 경험으로 초대한다. 주요 전시로「MOT에뉴얼 2023: 시너지, 창조와 생성 사이」(도쿄도 현대미술관, 2023), 「다층 세계 속 또 하나의 뮤지엄」(ICC [도쿄], 2021), 공개제작 「또 하나의 세계 10년째의 지도」(후쿠시마 미술관 [도쿄], 2019) 등이 있다.

### 宮田 篤 (みやた あつし)

おとなも子どももあそべるぶんがく「微分帖」など、ワークショップやドローイングによって他者との関わりの中にある差異を見つめることを制作の契機にしている。主な活動に「わくわくなおもわく」(はじまりの美術館、福島、2019年)、「びぶんブックス ことばの店:微分帖」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2019年)、「ふしぎの森の美術館」(広島市現代美術館、2010年)など。

#### MIYATA Atsushi

Miyata's work draws inspiration from the differences that can be found in relationships with other people through workshops and drawings, such as his *Bibuncho* book project for children and adults. Major projects include “Wakuwaku Na Omowaku” (Hajimari Art Center, Fukushima, 2019), “BIBUN-BOOKS PUBLISHING: A Bookstore Dealing In Divisional Documents” (Tokyo Arts and Space Hongo, 2019), “The Art Museum in the Mysterious Forest” (Hiroshima City Museum of Contemporary Art, 2010).

#### 미야타 아츠시

어른과 아이 모두 즐길 수 있는 문학「미분첩」등 워크숍과 드로잉을 통해 타자와의 관계 속에 있는 차이를 응시하는 일을 제작의 계기로 삼고 있다. 주요 활동으로 「두근대는 생각」(처음의 미술관[후쿠시마], 2019), 「비분북스 말의 가게 : 미분첩」(도쿄 아트 앤 스페이스 혼고, 2019), 「신기한 숲의 미술관」(히로시마시 현대미술관 [히로시마], 2010) 등이 있다.

### ユ・ソラ (ゆ そら)

刺繍の平面作品や立体作品のインスタレーションなど、白い布と黒い糸を使った作品を展開している。白と黒で表現された空間から日常とは何かを問いかけている。主な展覧会に「もぐく、たまご」(資生堂ギャラリー、東京、2023年)、「BankART Under 35 2022」(BankART KAIKO、神奈川)、「普通の日」(あまらぶアートラボ「A-lab」、兵庫、2021年)、「些細な記念日」(LOTTE GALLERY、ソウル、2018年)など。

#### YU Sora

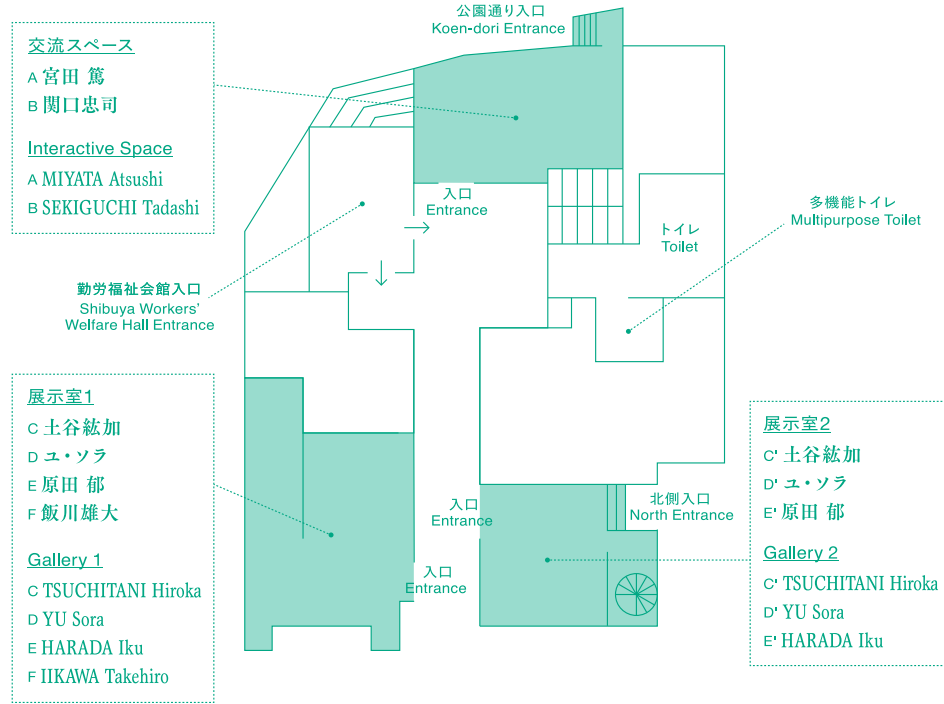
Yu uses white cloth and black thread to create two-dimensional embroidery works and three-dimensional installations. She raises questions regarding the everyday through her spaces expressed with black and white. Major exhibitions include “Mozuku and Eggs” (Shiseido Gallery, Tokyo, 2023), “BankART Under35 2022” (BankART KAIKO, Kanagawa), “An Ordinary Day” (A-Lab, Hyogo, 2021), “A Trivial Anniversary” (Lotte Gallery, Seoul, 2018), and others.

#### 유 소라

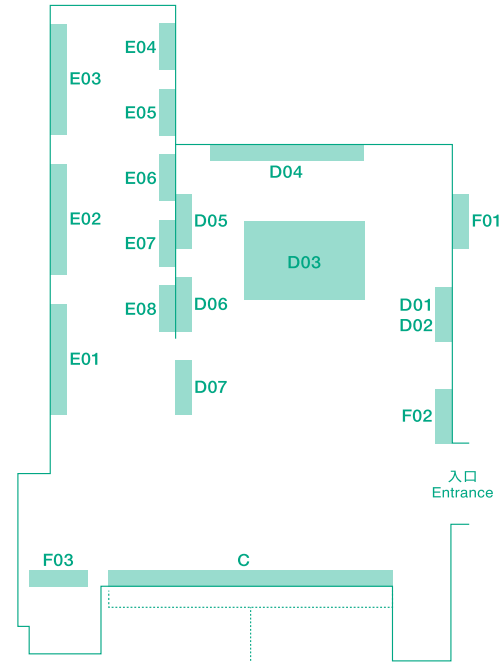
흰색과 검은색으로 표현된 공간에서 일상이란 무엇인가에 대해 질문한다. 주요 전시로는 「모즈쿠, 다마고」(시세이도 갤러리[도쿄], 2023), 「BankART Under 35 2022」(BankART KAIKO[가나가와]), 「보통날」(아마라부 아트 랩 'A-lab' [효고], 2021), 「사소한 기념일」(롯데갤러리[서울], 2018) 등이 있다.

# 会場図 Venue Map

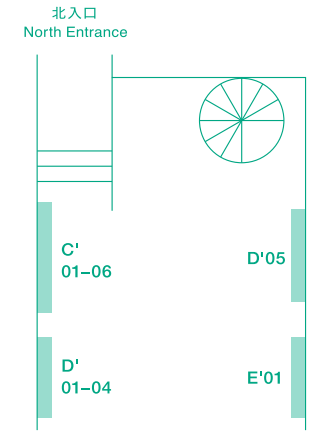
## 全体図 | Overall View



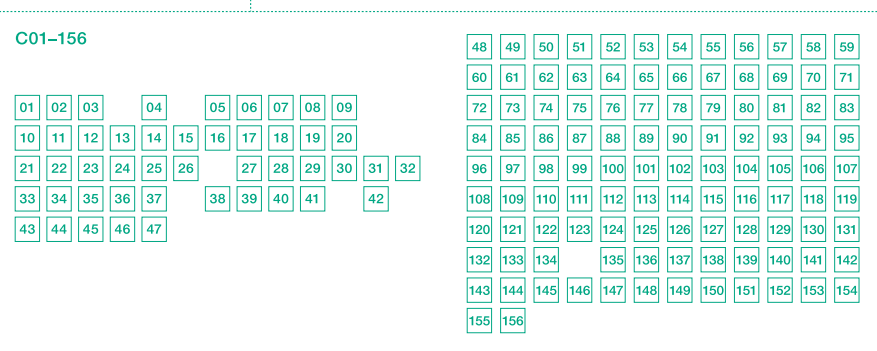
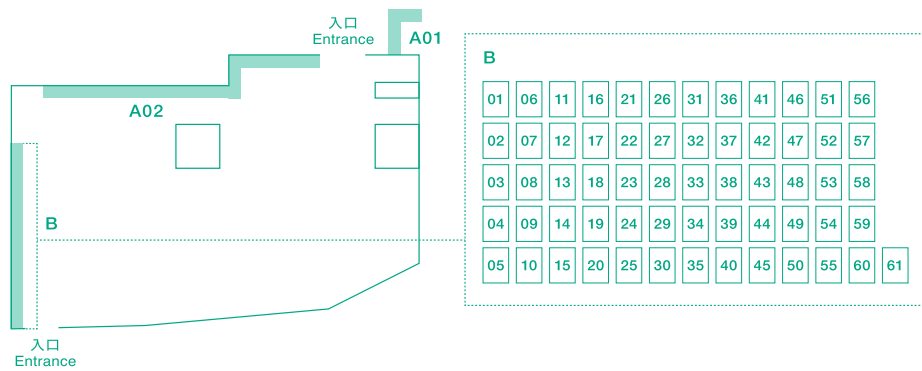
## 展示室1 | Gallery 1



## 展示室2 | Gallery 2



## 交流スペース | Interactive Space







#### 写真撮影・提供

撮影：阪中隆文 (pp.10–19, 22–24, 28–34, 35 [右下], 38–53, 58–64, 88, 97, 101, 105)

画像提供：宮田 篤 (p.20)

工房集 (pp.25–27)

特定非営利活動法人コーナス (pp.35 [右下除く], 36–37, 92)

原田 郁 (pp.54, 55 [左下除く])

飯川雄大 (pp.56–57, 64)

※記載のない画像は、東京都渋谷公園通りギャラリーによる撮影

#### Photographer and Courtesy

Photo: SAKANAKA Takafumi (pp.10–19, 22–24, 28–34, 35 [bottom right], 38–53, 58–64, 88, 97, 101, 105)

Photo Courtesy: MIYATA Atsushi (p.20)

KOBO-SYU (pp. 25–27)

NPO Corporation CORNERS (pp.35 [excl. bottom right], 36–37, 92)

HARADA Iku (pp.54, 55 [excl. bottom left])

IIKAWA Takehiro (pp.56–57, 64)

\*All images without credit are taken by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

## 謝辞

本展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りましたすべての関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。(順不同／敬称略)

飯川雄大  
関口志司  
土谷絃加  
原田 郁  
宮田 篤  
ユ・ソラ

吉野誠一  
鈴木孝史  
橋 美貴  
三浦 努  
内田伸一  
高見清史

宮本恵美  
渡邊早葉  
野村勇作

白岩高子  
笠松彩菜

笹 萌恵  
こいけぐらんじ  
向坂くじら  
ひうち棚  
もぐこん  
sasa /marie  
ケイコ

佐塚真啓  
中原崇志

CAPSULE

LAG (LIVE ART GALLERY)

高松市美術館

鳥取県立博物館

社会福祉法人みぬま福祉会

川口太陽の家・工房集

大地

特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナス

アートフロントギャラリー

## 日常アップデート Imagining the unseen everyday

### 展覧会

企画・担当：竹野如花（東京都渋谷公園通りギャラリー）

会場施工：スーパー・ファクトリー株式会社

作品輸送・展示：ヤマト運輸株式会社

広報物デザイン：田部井美奈、栗原瞳子

広報物印刷：株式会社サンエムカラー

広報：加藤志保（東京都渋谷公園通りギャラリー）

撮影：阪中隆文

会場記録映像・編集：阪中隆文、小山友也

### カタログ

企画・執筆：竹野如花（東京都渋谷公園通りギャラリー）

編集統括：内田伸一

翻訳：サム・ホールデン、アン・ウンビョル

デザイン：田部井美奈、小山みさと

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

発行日：2024年12月

### Exhibition

Curator: TAKENO Yukika (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Venue Construction: Super Factory Inc.

Transportation and Installation: Yamato Transportation Co., Ltd.

Publication Design: TABEL Mina, KURIHARA Toko

Publication Printing: SunM Color Co., Ltd.

Press Officer: KATO Shiho (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Photos: SAKANAKA Takafumi

Video Shooting and Editing: SAKANAKA Takafumi, KOYAMA Yuya

### Catalogue

Planning: TAKENO Yukika (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Editing Direction: UCHIDA Shinichi

Translation: Sam HOLDEN, EUNBYUL Ahn

Design: TABEL Mina, KOYAMA Misato

Printed by: Yamada Photo Process Co., Ltd.

Published by: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,  
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Publication Date: December 2024

©2024 Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,  
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture



飯川雄大

関口忠司

土谷紘加

原田郁

宮田篤

ユ・ソラ



東京都渋谷公園通りギャラリー  
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

